

325  
146

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30<sup>6m</sup> 1 2 3 4 5

始



特213  
967



事

業

卜人



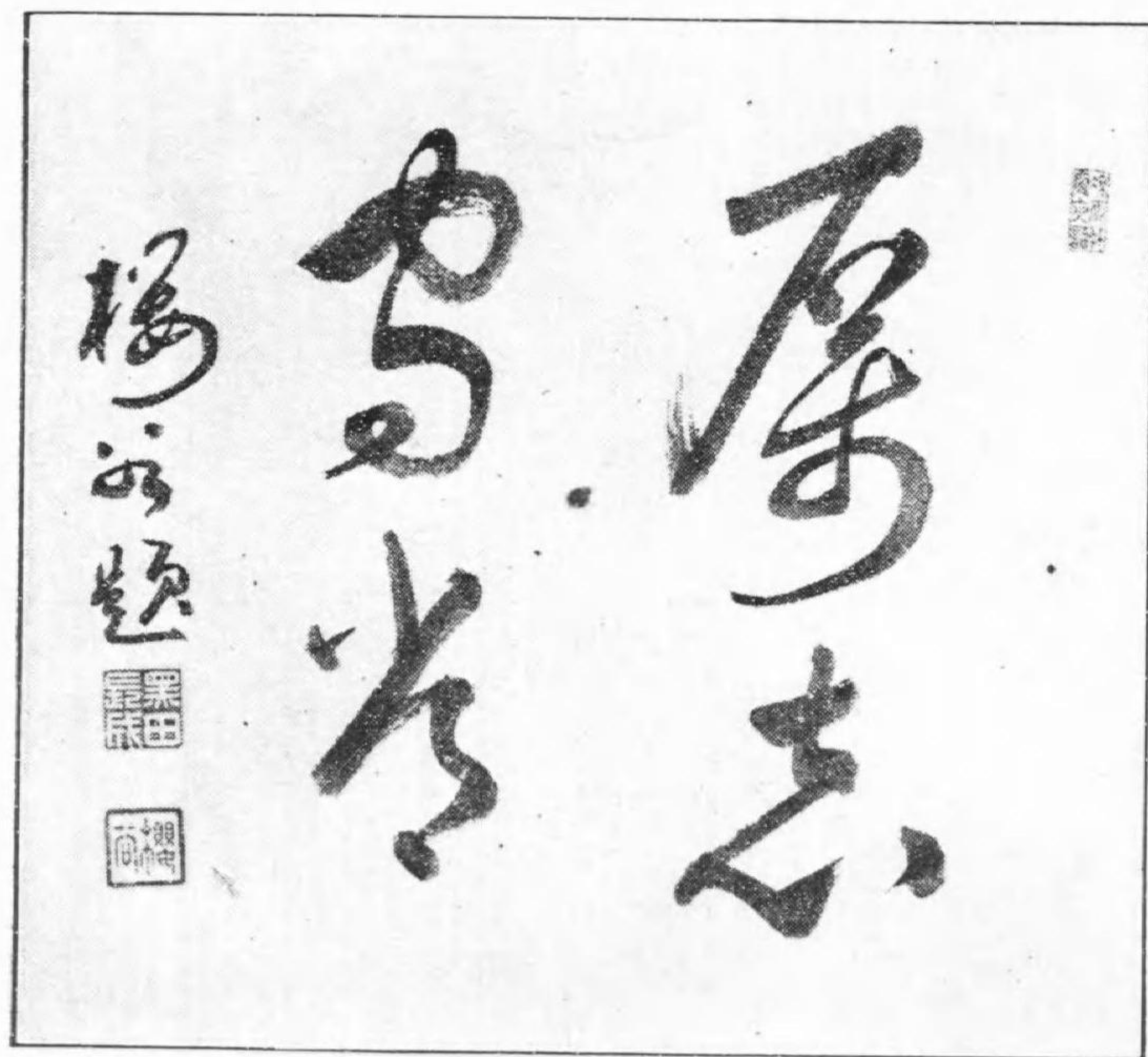
福岡時事社編



爵子  
下閣郎一愼野栗  
氏丸茂山杉

爵侯  
下閣成長田黑

爵子  
下閣郎太堅子金  
翁滿山頭



黒田侯爵の題字

有志者事竟成  
古今事皆然  
切莫半途而廢  
艱難苦學時

溪石堅

金子子爵の題字

頭山滿翁の書 宅野田夫氏の畫

妙在一心

之



内田良平氏の書

六山生大業

良平



## 序

大は國政より小は工場商舖の經營に至るまで事業の興るは其人を得るに在り。而して男子の眞價亦其事業によりて現る。必ずしも規模の大小成敗利鈍を問ふに非ず。之に對する態度を視んとするものなり。

蓋し事の成るは成るの日に成るに非ずして、輝ける成功の半面には隱忍刻苦の場面あるを常とし、自ら信ずる處厚く、時勢を明察するの達識と周到なる計畫と鞏固なる意思と變通の才幹を具有せる者にして始めて一業を興すに足るべし。漫に不運を啣ち漫に好運を望む者にして古來成功の榮冠を獲得したる例なく、此れ等の輕

薄子は縦令一時成功を僥倖したる如く見ゆる事ありとも忽ち權華一朝の夢を破らるゝものなり。吾人の學ぶべきは事業にもあらざれば又成功にてもあらず、多數の事業家の成功を贏ち得たる所以の態度ならざるべからず。

玄洋の波濤泊々として岩頭を拍ち、河川竝流として沃野を涵し、重疊たる山嶽無限の寶庫を藏する處、地は雄大にして物資に富み人は剛健にして潑刺事を好む。古來幾多の奇才逸足を出し大小の事業興起せるは怪しむに足らざるなり。福岡時事社此處に見る所ありて郷人先進者の行藏を温ね、蒐録して「事業と人」と題し之を公刊せんとす。就て見るに宛として名人の棋譜に對するが如し。古人曰く「百經を讀むは父の一遺書を守るに若かず」と。惟ふに環境

性行最も近く、垂訓多く卑近適切なる故を以てならむ。本書は此の意味に於て故父の一書とも見るを得んか。後進の之に對する徒らに様によりて葫蘆を描かず、須らく活眼を以て同郷事業家の躬行履踐せる道を體得するに努むべし。篇者の意掲載者の希望亦此點に存すべく、一言以て序となす。

昭和四年盛夏

相州葉山恩賜松莊に於いて

溪水 金子堅太郎



## 發刊に際して

「奮闘秘話事業人」の第一巻を出版するに際して實に感慨の無量なるを覺ゆる。蓋し多年私の抱懐して居た宿望の一つを達したからである。私は幼少の折早く父母を喪ひ艱軫不遇の裡に人生の苦酸を殆んど嘗め盡した様に思ふ。此の暗夜を往く様であつた前半生に於いて、絶えず意氣を鼓舞してくれたのは各種の立志傳である。

雨の夜も祖母の寢物語にそれを聞かされた。忙中の閑を偷んでは此等の話を讀んで疲れた心に自ら鞭打つた。或は直接先輩を訪ねて實驗談を伺つたこともある。本書中にある、先代中牟田喜兵衛氏の如きは、よく『若い時にウント苦勞して働けば其の酬いは所謂お阿彌陀様が申された通り因果應報である』と諭されたものである。月日は流れて波瀾重疊早くも三十年を過ぎた。舊態依然たる裸一貫ではあるが、茲數年來福岡時事經營の任にある關係上、特別知己の先輩を訪問する機會が多い、そこで世間には私と同様此の種の處世哲學に共鳴せらるゝ人も多々ある事と考へて、今日迄聞き得たる苦心談を福岡時事紙上に發表して來た。

元來、成功とは何ぞや云へば、必しも富者になる事でも無ければ位階を得る事でもない。其の

人の従事した事業が期待通りの効を奏してこそ、成功と云ふ文字は冠せられることと思ふ。所謂金に左右せられず事業に専念する、働けば其の酬いとして報酬がある、かくの如き快事が又とあらうか。心中の喜び、家庭の圓滿幸福、延ひては一國の隆運、何も六ヶ敷いことはないのである。往々世間には金を貯蔵することのみが、成功を考へられて金の奴隷となり、犠牲となる者が多い。事業の犠牲となつて賞揚される者は少いのである。何事にも幾多の難關がある。要はその難關を如何にして打開したかの點である。そこに幾多の秘話が残さる。若者は経験少きが爲めに失敗の憂目を見、経験多き者は躊躇なく切ぬけ得ることになると思ふ。そこで現在成功立志傳中の人で、その多年苦辛の秘話があるをすれば又自己の知己、先輩の内にあるとすれば、好参考たるべきは言を俟たない。

本書は郷土を中心とした眼前の人の奮闘秘話である。本書に依りて参考とし、若し會得の出來ぬ處は本書持參、本人に打つ突り、一夕苦心談拜聴も又、好参考資料であり、成功の捷徑ではあるまいか。本書はかゝる點に鑑みて、貧富の差は別とし「事業」其の物に成功した人、又成功しつつある人、千差萬別、各あらゆる事業を纏めたる處に、苦心の存する事を御了承願ひたい。調査に當りて先方の了解を得ない爲め、一人に十回餘の足を運んだ人も多々ある。材料丈け得て當人の秘話に接せず後廻しにしたものもあるが、併し幸ひ各方面の御後援と歓迎とを受けて、僅々一年有餘で第

一輯を發刊し得た事は欣快の至りに堪へない次第である。

末筆ながら、黒田侯爵閣下始め、金子子爵頭山翁其他の方々が特別に、題字、序文、其他の資料を賜はつて御激勵下さつたのに對し、深く感謝の意を表するに共に、此の上とも引續き第二輯、第三輯の刊行に際しても同様御聲援あらん事を祈る次第である。

昭和四年六月時雨降る朝

東京、麴町、山元町寓居に於いて

長野 民次郎

## 編者のことば

成功の彼岸に達して、靜かに我が來し方を見返る境地に及びたいのは、萬人の大願である。然し目的地に到り得る人生の勝利者は百人に幾人であらうか。

人生の變轉は、運命の支配を免がれ得ぬ。然し又運命は人力を以つて開拓し得ないものではない。よく發奮精勵し、之を助くるに儉素を以つてすれば、やかて、成功への大道は眼前に展開して、最善の運命は來たるものゝ如くである。

我が福岡の先輩は、優秀なる才能と、敢えて人に下らざる氣節を以つて、數奇を極むる運命と戦ひ、熱火碧血の奮闘を續けて、同事に彼岸の光明に到達せんことをあつゝある。

我が福岡時事に於いては毎號福岡市及市を中心とする縣下の各方面にわたる立志傳中の人の、奮闘秘話を網羅して來てその紹介した數も五十名に達したのである。

題して『事業と人』と云ふ。集むる處は皆先輩の酷烈なる奮闘による躍進の經驗であり、その活教訓は、幾多の未だ名なき立志家を、感奮興起せしむるに足るものがある。併かもその先輩は讀者の日常接し得る近い處に居るが故に、その印象は一層生々しく、親しさの密なるものがある。

編者のこゝば

二

自らの努力を以つて、嚴肅なる現實に即する萬象の因果法則の支配により、その運命を開拓せんとする幾多の立志青少年に對して、その指針となり、その伴侶であるとともに、又鞭撻者であることを期して本書は編纂された。若し本書が多數有爲の人士に熟讀玩味されて、幾分なりとも慰藉を與へ、又拍車となつてその成功に資しうるならば、編者の最も幸ひとする所である。

昭和四年六月上旬

「福岡時事」編輯部に於いて

池内識

### 奮闘事業ト人目次

高島炭坑諸色屋から、成功した俠氣の人

定期師 五十嵐芳之助氏……………一

前半生に養い來つた膽力で實業界を乗切る

事業家 池見辰次郎氏……………二

農夫、鐵工場人夫、屑菓子之行商等の辛苦を得て、愛の教化事業へ

至誠學舎長 稻永久一郎氏……………二七

高等官から、かしわ飯やに成つた變り種

元博多驛長 岩倉音熊氏……………二九

漸進主義をとつて遂いに日本一の綿屋に成つた

製綿業 原田忠右衛門氏……………三三

目次

一

醸造屋から日本の大實業家に成つた

貴族院議員 太田清藏氏……………四二

大學病院と競争して開業した福岡市小兒科の草わけ

醫師 故小野重喜氏……………五三

魚の行商人から福博一の仕出料理屋になつた

やま利主人 落石鹿吉氏……………六〇

子守など辛酸をなめて福博一流の裁断師になつた

洋服店主 渡邊潜藏氏……………六八

毛筆製造家にして緑綬褒章を授けられた

平助筆本舗 河原田平助氏……………七三

亡夫の遺業を継ぎ吉田金物店の隆運を拓いた

女丈夫 吉田縫子刀自……………八一

英語教師から三井の總理になつた

男 爵 團 琢 磨氏……………八六

士官候補生を断念し理化學を修めて成功した

王子製紙 高田直屹氏……………九六

博多情調ゆたかな仁○加煎餅を發案して成功した

東雲堂主 高木喜七氏……………一〇〇

豪放だつた先代の後をうけて玉屋デパートを設立した

玉屋社長 田中丸善藏氏……………一〇六

縣廳の下級官吏に見切りをつけて、上京勉學して立身した

蓬萊生命専務 武末祐三郎氏……………一二六

奮闘主義を一貫して、遂に高山組主になつた

建築業 高山憲三氏……………一三四

豆腐の行商から福博米商界に覇をなした

米肥商故財部萬太郎氏……………一四三

終始一貫洋服屋で叩きあげた

裁断師坪田千太郎氏……………一五二

商策悉く圖に當り岩田屋王國を築いた

吳服商先代中牟田喜兵衛氏……………一六〇

日給十五錢の給仕から運輸王になつた

國際通運社長中野金次郎氏……………一六五

外國商館の丁稚から九州月賦販賣の王になつた

吳服商村上榮吉氏……………一八二

歟を捨て行商を續けて成功した

博多織商上野熊太郎氏……………一九〇

役人生活から實業界に入り福岡市長になつた

博多取引所理事久世庸夫氏……………一九六

無給の丁稚から書籍店として大成した

積文館主八木外茂雄氏……………二〇二

懸賞に入選し世界的な藝術寫眞師になつた

藝術家安本江陽氏……………二〇九

九州持下りから全国的な名織家になつた

博多織元松居元右衛門氏……………二一八

三つの信條を以つて躍進する

三井物産の松本榮五郎氏……………二二八

連綿たる十代の老舗をうけ、家名を全日本にあげた

鑄造家深見平次郎氏……………二三四

波瀾万丈の半生を経て成功し、精神界に活動する

帝國興信所長 後藤武夫氏……………二四三

百姓嫌ひで東京に遊學し、學問がまぬるいとて事業家になつた

坑木材木問屋 合屋榮太郎氏……………二四四

外國製の一葉の寫眞を見て發奮して洋行し腕を磨いた

寫眞師 後藤千代次氏……………二五九

純博多人の格式を代表するその生涯の爲人

博多三元 遠藤甚藏氏……………二七〇

朝鮮の税關吏、蒙古貿易商より轉じて自動車で成功した

實業家 江島廉太郎氏……………二七五

活版所の小僧から吳服商に轉じ、再度の火災に屈せず成功した

三笠屋主 赤間安兵衛氏……………二八二

桶屋の弟子から福博有數な族館の主人になつた

高島屋先代 故木原喜造氏……………二八六

神官の次男坊から九州唯一の吳服卸商となつた

實業家 木梨久太郎氏……………二九二

漂浪の商務見習から福博海運界の第一人者になつた

貿易商 北愛藏氏……………二九九

數理的頭腦と筑前浪人の風格を有して自動車界に活躍する

實業家 岸本重任氏……………三〇六

獨特の宣傳で不景氣に儲け福岡松屋の名を賣つた

吳服商 宮村吉藏氏……………三二三

小間物屋で炭坑、鐵道迄に手を出し紳商となつた

事業家 故下澤善右衛門氏……………三三八

松葉賣りの少年から九州屈指の小間物問屋を築いた

明智の人先新免久次郎氏……………三四

坊主になれず民権運動に投じて數寄の半生を辿つた

中檢取締 信濃梅吉氏……………三〇〇

小學教師から新聞記者三轉して實業界に活躍する

昭和の俠客 平田學氏……………三三六

工業學校を生たまゝで獨力得意先を開拓した

土木建築請負業 森田彦隆氏……………三四三

人物デッサン

芽出たい藤翁 藤金作氏……………四二

髯大熊の仙骨 大熊淺次郎氏……………五九

河内氏の再起如何 河内卯兵衛氏……………八〇

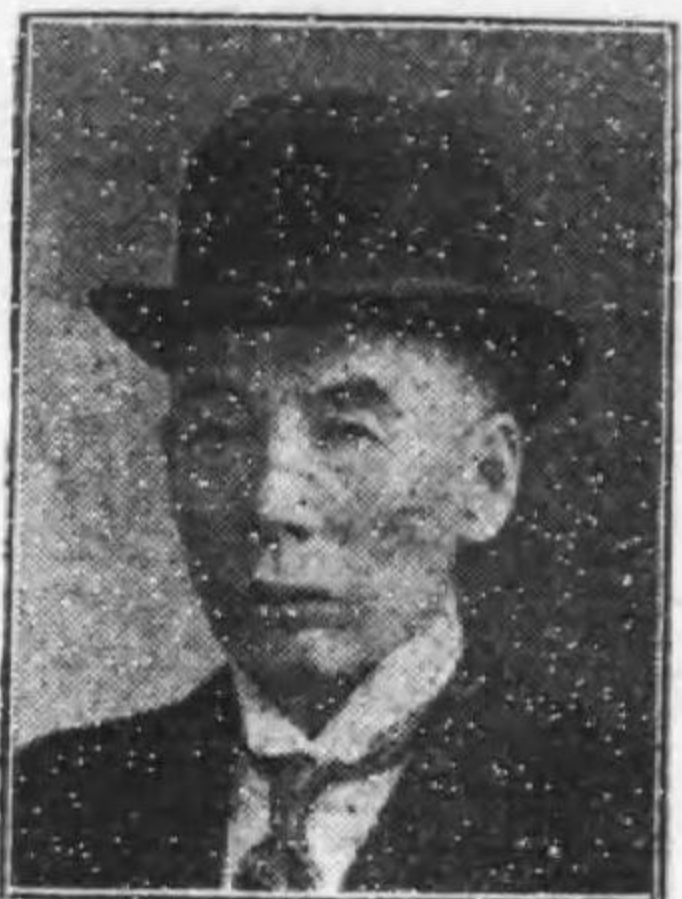
智の人櫛橋氏 櫛橋岩太郎氏……………一九五

奇骨三隅氏 三隅忠雄氏……………三三



秘奮 話 事 業 ト 人

(イロハ順)



高嶋炭坑の諸色屋から成功した  
俠氣の人

定期師 五十嵐芳之助氏

◇諸色屋をやめて上京

朝に東に夕に西に利を追ふて動く機會主義者の横行は、遺憾ながら現代の一事實である。信ずる友に裏切られ部下にあざむかれ上長に捨てられる、數へ切れない世の不幸が、人間生活史上に織なされてゐる。

然し喜ばしきかな、我が筑前人は背信の行爲を怒る強烈なる心情の所有者である。先達と後輩の

定期師 五十嵐芳之助氏

聯絡は鐵鎖の如く、血と意氣は距離ミ時とを超越して居る。

一瞬千萬金を得て一朝富者の享樂境にあり、一夕又産を失へばすがくしや裸一貫男一匹、蓋し米穀商か商人中の商人ミ稱へらるゝ理由はこゝに存するものであらう。五十嵐翁の後半生はこの米仲買の生涯である。

五十嵐芳之助氏は安政五年正月十八日細雪ちらつくころ福岡市上名島町に生れた。

嚴父は兒島翁助、氏は其の五男である、母堂は博多鏡町博多織屋山崎半太郎氏の妹であつた。

兒島家は元小早川家につとめて名島に住んだ。黒田如水公が福岡城を築いた時、鍛冶職の頭取として勲功があつた。その後三百年扶持を頂いて來た。

嚴父の兒島翁助氏は今は時めく團琢磨男爵の實父神谷宅之丞氏の親信が厚かつた。

土族が刀を奪はねばならぬ明治維新の變亂があつた。兒島芳之助氏は即ち二十四歳の折に博多行の町の五十嵐家の養子となつた。

當時五十嵐家は長崎高島炭坑がまだ後藤象次郎氏の管下にあつた時から諸色屋をやつて居た。經營よろしきを得て、割合に裕福な生活をやつて居た。然し青雲の志は蓬萊の中にてはむなしく土塊

の中に萎まねばならぬ。

年二十八歳の時、花の江戸に出掛た。

すべての墮落が都會で芽ばへる様に又成功の種も都會に於て收穫すべきであるは、今も昔も變りはない。當時上京熱は青年の流行であつた。しかし一般の青年が刻苦して學問の奥殿に精進するに反して氏は實學ををさめんとしたのだ。

即ち黒田長博公に建白して博多織の改良の重要なことをのべて自らその研究に従事し、東京神田鍛冶町にすんで居た。後今川橋に移つた。この時養父五十嵐傳平氏の計が傳はつた。

### ◇再び高島に歸る

明治二十三年、三十三歳の折氏は荷物を纏めて高島に歸つた。

肥前高島、あれ生地獄、一度行つたら二度歸られぬとうたはれて居る。

此處は炭坑主ミ納屋頭の完全なる専壓の元に、坑夫が黙々として馬車馬の如く鞭たれながら働く所だ。

養父の友人で納屋頭をして居た小曾根某といふ人が居た、茅ヶ崎の人で一帶に顔役で有名であつたらしい。しかし三菱の石垣工事の請負をして大失敗し他人名儀でなくては仕事が出来ない様になつた。芳之助氏は故養父の水魚の交りを續けて居た友人を見殺しにするに忍びない。愛野某といふ冷刻なる高利貸から金をかりて小曾根氏をして仕事を續けさしめて居た。

自らは端島に支店を設けて商賣に愈々油が乗り出して來た。

しかるに長崎から高島に歸ると小曾根氏が病氣だとの報が來た。

早速かけつけて見るに、診療歸りの醫者は小曾根は絶望だといふ、病人の枕邊に立つて氏はその顔をつくつくながめた。病人はやせた頬に涙を浮べて、そして五十嵐氏の手をしつかり握つた。

「私はあなたのお父さんやあなたに負ひきれぬ程世話になつた、その報恩も出來ず又例の愛野の金もそのまゝにしてはどうしても五十嵐さん私は死にきれません」と男泣きに泣いた。

### ◇友人の爲に破産

五十嵐氏は義侠に燃えた。「決して心配することはない。私は今二つの店を持つて居る、二つを閉店してもあなたの顔は立てやる」とかたく誓つた。

小曾根氏の死が傳はると愛野は矢の様に五十嵐氏に貸金の返済を迫つた。氏は遂に會て病人の枕頭でちかつた約束の如く、二店をしまつて返金をして跡の事業は冷平田慶太郎(小曾根の甥)に繼がしめた。

當時氏の妹婿の山崎氏は長崎濱町で博多織商を營んで盛況を呈して居た。例の愛野は小曾根氏に對する貸金問題で遂に芳之助氏に破産の處分を申請した。

それは丁度我國に破産法が布かれた年で芳之助氏が長崎で第三度目だつたといふ。

家人のにげ出すのを防ぐために警官が隣の家に出借りして見張つて居たといふ。しかし他の目こそ珍らしく見えるものゝかくあらしめた當人の五十嵐氏に見れば又感慨無量の點があつた筈である。

### ◇期米界へ乗出す

明治二十八年十月氏の三十八歳の時再度の上京を決行した。しかしこのたびは米穀仲買商の金チオボの支配人山田要三郎氏の手代に入つた。しかし主人が失敗の不幸に會ひ、氏は次に山キの店員になつたが、こゝも違約處分にあつて失敗した。山キの整理が氏の今日ある基ひではないかと思はれる。紊亂せる内部を快刀亂麻の如く二週間で整理を物の美事にやつてのけた。その整理振りをひどく見込んだのが向島の吉田良吉氏である。吉田氏は千住銀行の頭取で、山キの出資者であつた。吉田氏は五十嵐氏に「君が開店する場合いつでも飛び込んでこい充分相談に乗つてやる」とひどく氏を信じた。

五十嵐氏は心中ひそかに丸ヨの店を開かうと計畫して居た。しかるに又山キに整理すべき危機が訪づれた。

氏は遂にその整理を終了して自ら丸ヨと稱する店を開いた。勿論米の仲買商で、これが明治三十七年である。

しかるに、直に第一回の失敗に出會した。氣色を損じた氏は金主の吉田氏の處に飛び込んで「裸にしてくれわしは商賈をやめる。あなたに借りた金を今かへすだけ持つて居るどうぞ取つてくれ。」

といつた。

しかるに、吉田氏は一萬圓を金庫の中から取出して五十嵐氏に與へ、「元氣をおとさず、男らしく再び立つて見ろ」と激勵した。其の數日後當つて三千圓の返金が出来たといふ。

明治四十二年に第二の失敗に見舞はれて居る。

早速三萬圓の金の借用を吉田氏に申込んだ。吉田氏は二千圓を出して「けふはこれでだまつて歸つてくれ」といふ挨拶をした。五十嵐氏は直に青木取引所理事長の事務室にかけ込んで「取引所に一大事變が起つた」といつて會見を申込むので、青木氏は取るものも取り敢ず氏に會見する。すると自分の身を助けてくれなければ取引所の信用が落ちるといふ論法を用ひた借金法である。しかし青木氏は快よく氏の懇願を容れた。

この頃から東京取引所に五十嵐芳之助ありとの言葉を聞く様になつた。其の後二十五軒の仲買店聯合會の委員となり白井、松口、松谷、原源の大手筋を大向ふに廻して、三十八萬石の大受けをして、一躍巨利をしめさして名聲を博し全國を震動せしめた。

勝も裸負けるも裸、これが期米界の常である。やがて氏は三度目に再び起つ能はずと見られた失

敗の大打撃を受けた。吉田氏は當時病氣で臥床して居た。その氣分のよい時向島に氏は吉田氏をおとづれて辭意をもらし、自らの店を廢業し鈴木の店へ三十圓の月給で働くことにした。其の歸りさ赤龍子の元に立寄つて易を見た。すると近く開運の吉兆があると告げた。

### ◇七 轉 八 起

間もなく千住銀行から呼び出しが來た。ゆけば吉田氏が五千圓を出して再起を促した。

丸イの看板を出して開店したのは其の後間もなくしてどあつた。が又た失敗はすぐおとづれた。その折天下の松辰に見込まれて、その機關店となり、松辰と五十嵐氏の間直通電話がひかれた。

明治四十年頃松辰の賣にテン一の買の一大快戦が試みられた。世人はその結果を恐れ始めた。しからに果然松辰テン一の協定が出來た。二人は步調をそろへて買ひと變つた處が、日本國中皆各地の仲買が賣りと出て、松辰は一夕に百五十萬圓の大失敗をやつて違約處分を受けた。

この後増井氏を相知るに至つたのである。即ち共同にて仲買業を始めた。二人は全く紳士的の交際

を續けて來た。五十嵐氏は増井寅之助商店の支配人となつた。これ大正元年の事である。この後ずつと生活に變化はない。今迄半期決算に三回は無配當の場合があつたが、其後五千圓乃至五萬圓の利益をあげ續けて來た。

この頃氏の元の顧客で期米で大損をして家産を傾けた人が居た。千圓を工面して再び相場に手を出さんとしたが氏は極力説いて之を中止せしめた。この人は斷然相場から手を引いて一年位センベイ屋をやつて居た。この人が氏を訪ねて來て立川の地をしきりに買へとすすめた。即ち土地の村長の他に一人氏と三人で一萬五千坪他に七千坪を坪五圓の地價で買つた。間もなく立川には飛行場が出來政府の土地買上げがあり七千坪の方には工場が出來て巨利を得て居る。利益はやはり主人と折半した。

氏は長崎に二萬圓を出資して大春石材合資會社を經營して居る。この石材は製紙用に使用される。

新春と盆會の二回氏が福岡に立ち寄つて長崎にゆくのは會社の状態を知らんがためである。

氏は本年七十二歳、その來し方をながむれば生涯が俠氣、義理と律氣に貫かれてゐることがわか

る。利は追ふものよみに捕はれず。氏が今産をなして、平田學氏と共に筑前人の後輩を世話して居るのは、萬人皆周知の事である。老身を東都の寒風のおかす又緩ならざるべし。願はくば自重せられん事を。

### 附記

五十嵐氏が二十八歳の折、東京に於いて博多織研究の時の如き機械一式を博多より取寄せ、及び優秀なる職工を呼びて専心斯業の發達に盡し三井吳服店（現三越の前身）に賣込みて愈々名聲を博する様になつたといふ。時も折明治二十二年上野共進會開催には、福岡區役所より出品を命ぜられ二等賞を授與されるの光榮に浴したる如き、如何に氏が研究に勉めらしかを、然るに養父五十嵐傳平氏の訃の爲めに歸郷は實に残念である。



前半生に養ひ來つた膽力で實業界を乗切る

## 事業家 池見辰次郎氏

### ◇線の荒い輪廓の大きい型

雲慶の彫刻に見る様な、荒削りで線の大きい人物のタネが、だんぐ世の中から失はれて行く中に於て、わが池見辰次郎氏の如き型の人を見ることは、愉快である。氏に對する者は、浩蕩たる夏の海か、又は威容ある山に對するが如き感じを與へられる。而も其の言動行藏は無修飾、無技巧、天真流露にして天衣無縫、どこに其の鋭鋒が包まれて居るか判らずして、何となく人を壓する。こは恐らく氏が過去半生に於て世のあらゆる濁流、狂濤と闘ひ、俠士としての面目を始終し來つた體験と修養の致すところであらう。

池見氏の人物を具さに物する時は、恐らく大冊を爲すの外はない。氏が少壯客氣の勇に任せて、

官憲も能く手を染め得なかつた所謂西戸崎事件（土木組の知名の大親分二人が輩下數百人を提げて血の雨を降らさんとした）を單身で解決し、一躍して博多池見の名を天下に賣つた前後の講談的履歴の如き、或は好箇の大衆讀み物の材料ともならう。又九州帝大創設の頃、舊柳町遊廓移轉問題の責任の衝に立ち、廓内の財政難と、官邊の壓力との間に身を處して幾たびか決死の膽を固め、至誠天に通じて商傑渡邊與八郎氏との諒解を遂げ現在の新柳町を實現したが如き、一面關西の溫柔鄉博多柳町の歴史に逸すべからざる話説の主人公ともなつて居る。これらは池見氏の生涯の『前期』に屬し、これまで多く新聞雜誌に記載されて、世人の多く知る所である。故に茲には、既に世の中にその盛名を謳はれ、動かす可らざる地盤の上に立つてその晩生の事業を完成しつゝある、後期の池見氏を傳する事としやう。

### ◇政界と實業界への進出

代議士選挙のたび毎に、氏が粕屋に於ける勢力を提げて立つだらうとの觀測が行はれた。が氏は何時も噂を裏切つて容易に起たず、推薦を辭退しつゝ今日に及んで居る。政治がまんざら嫌いでは

い事には氏が市會に出で、久世氏と相許し、政民の抗爭を巧みに緩和調停しつゝその手腕力量を示した事によつて認められるが、然し氏の政治に於ける、道樂の範圍を出でずして『生活』ではない謂はゞ實業に従事する傍らの餘技にしか過ぎないだらう。即ち氏には居常肝膽を砕くところの事業がドツサリある。試みに其の關係せる會社の地位を列記すれば

大日本酒類醸造株式會社長、九州興産株式會社長、九州蠶種株式會社長、青島鹽業株式會社取締役、福岡印刷株式會社取締役、九州劇場合資會社長、博多魚市株式會社長、西海土木會社常務取締役、大日本清酒株式會社長

其他公職を學ぐれば福岡縣水産組合副組合長、筑豊燒酎醸造聯合組合長福岡縣消防組々頭代表者福岡縣蠶種同業組合副組合長、福岡縣遊廓聯合會會長、九州遊廓聯合會會長、全國遊廓聯合會會長、福岡粕屋會長等々、名刷一枚にははゞかり切れぬ位の肩書がある。特に右諸會社に於ては何れも責任の代表者である限り、その業務の監督をするだけで一ト骨であるに異ひない。宜なり、氏は今春の市會議員改選に當り、前期の副議長任を名残りとして一應政治畑の足を洗ひ、實業一本槍で行く事となつた。特に今氏が力を傾注しつゝあるは、酒精會社の九州合同に次での全國聯盟である。

## ◇事業合同の通り役

『誠心誠意』は池見氏の生涯を通じて掲ぐるモットーだ。此の信條に加ふるに耿々たる氏一流の膽氣を以てする所、殆んど成して餘さざるは無い。事業合同の如き、常人の難しとする所も一たび池見氏の手に掛れば、立所に解決する具合は、やはり『事業は人』なるかなである。昭和三年以來、全国的に悲惨な状態にあつた酒精會社を救済すべく企圖した氏は、或は政府當路に、或は當業者に、晝夜兼行その超人的努力を以て斡旋奔走した結果、同年八月各社一齊に株主總會を開催して合併決議を爲し、九州各社永年の懸案は解決されて茲に大合同の目的は達せられた。次で氏は大阪に乗出し、全國同業會社を勸説して價格の協定、全國的生産制限協定に成功し、四年二月東京丸の内工業俱樂部に於て之が調印を完了した。其後關東關西の代表者を糾合して全國同業聯合會を組織し、氏はその主腦幹部として斯業の改善發展を策する一面、九州合同會社の事業を鮮滿に擴張すべく計劃し、釜山に起工された一大工場も四年六月に竣工、新製品の産出を見るに至つた。斯の如く斯業は全國的統一の状態になつたが、九州合同會社のみの納税額を以てしても七八百萬圓程度に及ぶ事實に徴して、國家經

濟に關する所大なるを知るべきである。九州合同會社は合同當時長男茂隆氏を取締役とし、自らは相談役で後見して居たが、社長就任の要望黙し難くこれを引受け、下關市觀音崎の本社に福岡から通勤といふ精勵振りを見せて居る。

## ◇池見式の風懷

池見氏は斯の如く各方面の事業に關係し、その投資から上つて來る収入も莫大であるが、世間に有り勝な富豪の如く、錢のために愛せざる所にその信條の床しさが見える。氏が社會各方面からの勸請に對し、公共事業や慈善事業に投じつゝある金は、尠からざる額に達しよう。西郷南洲は兒孫の爲めに美田を買はず云つたが、わが池見氏もその風懷あり、貧者の子弟に學資を貢いでその出世を楽しみ、郷里仲原村で慰安會や敬老會をやつて村人達を慰め、各地社會事業に投出する金を惜まぬためか、家に借金の絶え間が無いとの話を聞く。蓋し事業は氏の生命であり、天下の財は之を大きく得て大きく散ずるとの抱負に氏の躍如たる面目ありとせねばならぬ。此の調子だから氏は半面逸話の人であり、無邪氣放膽なる『池見式』の逸話は世間に膾炙するところで茲に贅せず。而して氏の



自慢は『過去数十年間一日も病氣休養した事實がない』『五十歳迄は他人の面前で汗を流した事がない』『一度に大食する關係からか、決して空腹を訴へた事がない』『一度も悲觀的な言葉や苦痛の色を現はした事がない』等々で、これは傍人の裏書するところ、尋常茶飯事とは云へ、また凡人の企て及ぶ事ではないかも知れぬ。氏が斯く太陽の如く精力的で陽氣な性質だから、家庭は霽々として家運は盛んである。長男茂隆氏は大學を卒へ、柔道三段の腕前ある青年紳士、よく乃父の事業の後繼者たるべく、養子利夫氏は東京高師を出て市俄古大學に三年勉學、歐洲を一週して歸朝、目下鹿兒島縣加治木高等女學校長の職に在る。池見氏たるもの何等後顧の憂ひなく、胸中無一塵、思ふ儘に好きな事業界を奔馳して、その晩年を豊かにすべきであらう。

◆附記 もと池見家は粕屋郡仲原村の素封家、嚴父茂吉氏は温厚の長者として聞え、多年同村々長として村政に盡瘁し、七十三歳にして歿した。池見邸の奥座敷一段高き一室に、晁々輝く大佛壇には氏が祭祀を絶さざる孝心が見える。池見氏は明治七年二月二十三日の生れで本年五十六歳、その旺盛な活力を以てすれば、その社會的活動は茲二三十年は繼續されるであらう。



農夫、鐵工場人夫、屑菓子之行商等の  
辛苦を経て愛の教化事業へ  
至誠學舎長 稻永久一郎氏

◆靈の國

他と異なつて救濟事業は、成功するにつれて失費は嵩み、物質的に失ふ處が多い。然し反面に神の國に入る狭き門は益々廣められるのである。

『前途に光明を認め、希望に輝いて始めて、人間に堅忍不拔の精神が確立するものである。』  
少年保護事業に後半生を捧げてゐる、稻永久一郎氏はかく教える。

氏は幾多の辛苦をつぶさに嘗め、やつと自ら經營する製菓業が成功し、益々發展の緒についたと同時に至誠學舎を池袋に設け、環境による怠惰放縱な少年を、各種の罪惡から救ひ、保護教養し社會生活の中に希望を有する、光明を認めてゐるものとして、復歸せしむる事業に専念してゐる。

至誠學舎長 稻永久一郎氏

同學舎は大正天皇の御大葬に當り、多摩陵の御奉輦舎一棟を現形の儘下賜さるゝの名譽をうけた。至誠學舎の一同は益々精勵努力し、同舎の本分を全ふせん事を誓つた。

### ◇人生の變轉を望んで上京す

この至誠學舎長の稻永久一郎氏は、粕屋郡志免村字南里の産である。家は農を業とし、祖父の半次郎氏は庄屋、保長、戸長などを勉めて、人望厚く、村人は爲めに記念碑を作つて、氏の徳をたたへた。父君奎之助氏も助役、村長の職にあり、十数年の長きに亘つて、村政に盡瘁した。久一郎氏は志免小學校大川高等小學校を卒業した、年十六歳其後十年間は父に従つて鋸を握つてゐた。

田園詩人は自然を讚美し、四季の變化を賞して、泥濘の中に呻吟してゐる農夫迄も、神聖化し詩化してしまふ。成る程自然は美しいに違ひない。然しそこに息づく人間は決して美しいものではない。或る人は極言する。

「田園には愚鈍な者が残ればよい、愚鈍でなければ田園の生活は出来ない」と。

稻永氏は人生の變轉に富む、都會の華々しい激しい競争の生活にあこがれ始めた。

遂に父を説いて、三年間の暇をもらひ、成功しなければ決して故里を踏まない堅く決心して、上京することにした。

弟の洋服を貰ひ靴代に三圓を投じ三十圓を懐にして明治四十年の七月の上旬、當時東京に開催されてゐた勸業博覽會視察かたがた、花の都に向つて出發した。

然し不幸にも途中大阪で病氣に襲はれてゐる。漸く上京して芝の安下宿にやつとたどりついた時懐中は已に空しかつた。一ヶ月十三圓の下宿料と聞いて田舎者の氏はびつくりして、一日も尻を据へる事が出来なかつた。

始め氏は機械工にならうと希望した。博覽會場を一巡したが、機械陳列の前に立つて興味つきず立去り難かつた。途中瓦斯發動機が最も氏の注意を惹いた。

瓦斯發動機の機能は、高田商會の鈴木音五郎氏が説明してゐた。稻永氏は當時三田の慶大の裏に住んでゐた鈴木氏を訪ねた。その時全部合せて五圓の所持金の半額二圓五十錢を土産の水菓子代に割いたと云ふ。

## ◇人足から職工へ

鈴木氏は上村良七氏に添書を書いた。久一郎氏はこゝに約して瓦斯發動機械工場に働くことにした。然し上村方では四疊半の一間に、夫婦小供三人、お婆さん之に氏を加ふれば七人で起居しなくてはならぬ。病後の氏は到底この生活に堪え得なかつた。寧ろ中年の身は人夫を志望して通勤の都合もあり、工場附近が便利と考えて、人夫宿屋に移つた。

この頃芝浦鐵工場に通ひ始め、日給月末拂四十錢、其の日拂で三十八錢であつた。

人夫宿屋も月六圓三十錢で然かも六疊の部屋に、十人が雜魚寢してゐた。氏のこの生活は一年間續いた。こんな生活をなさねばならぬ人間の中に、偉い人がゐる事を實地に見せられ、この者らが立派な才能を備へながら充分それを發揮する事の出来ないのを、實になげかはいしい事に思ひ、又彼等が如何なる半生をたどつて來たか、深く感じた筈である。後の至誠學會の創立の一理由は蓋しこゝに發してゐたであらう。

芝浦の工場を退いてからも、轉々として工場人足として渡歩いたが、多く東京機械會社の輪轉機

専門に働いた。日給五十錢、夜勤をすれば二人八分を受けた。故に一週間も徹夜を續け、二十八圓を貯金し、其の金を投じて人足より機械工見習ミなつて、吉村工場大細工場仕上げ工に職工ミして勤むる事になつた。一日仕事に熱中し小便するのを忘れたミ云ふ。一年後工場主に認められ、拔擢せられて日に五十九錢を給せられた。

氏はこの頃外國製の機械に精通してゐたので、舶來品のニツクネイムを頂戴してゐた。

## ◇三年たつたが成功はせぬ

三年の月日は経つたが、成功は遂に氏を訪れてゐない。當然福岡に歸らねばならぬ期限が來た、遂に歸ろうとした。

然し氏の夫人は貴方は成功しなければ故里に歸らないと明言して上京したではないですか。今お歸りになることは男として出來ますまい、との、進言を入れて歸郷を中止した。この頃隣の菓子屋の職人に、製菓法を聞いて、成程面白いと思つた。機械の發明は金なくては、その目的に進み兼ねる、氏はこの方面を斷念せざるを得なかつた。萬やむを得ず、費残し十圓の貯金を資本にして菓子

屋を始めた。

先づ澁谷長泉寺前に家を借り、二圓六十錢の半分の前家賃を拂ひ、引越し費用三圓、車借代八十錢を出して残りの金で菓子屋の生活を始めた。

### ◇心氣一轉

即ちビスケット屑を一斤七錢で五十斤仕入れて、九錢で小賣商に卸した。小賣商はこれを十二錢で賣つたが尙、他の店より五割安であつた。氏は商業の面白い事を知つて、心氣一轉し愈々商人で身を立てる事にした。其の後毎日ビスケットの行商を續けるのに興味が湧いて來た。

明治四十三年本所深川の大浸水に、濡菓子を買占めて、ちよつと懐を温くして、青山の家賃七圓と云ふ處に移轉した。

次に丸の内の日比谷公園前に、三尺に二間半の一月八圓の家を借りて八圓の雜作をし店を張る様になつた。大分順調に進んだらしい。

### ◇夫人と永別

不幸、漸く頭をあげんとした時夫人が永眠した。氏は剃髪した。成功はせぬ。妻は死なす。何の面目あつて故郷に歸ろう。氏は涙をのんで三百圓の費用を出して運んで來た夫人の死體と共にさびしく家門をくぐつた。然し故郷の人は却つて氏の心情を汲んで、言葉を盡して氏を慰め、その再起を促がしてやまなかつた。

四十九日をすまして、氏は再び上京したが、店には殘品は一つもなかつた。然し再起の情禁じ難く、勇氣百倍した。先づ資本を得なければならぬ。

時計を質屋に入れんとしたが、質屋は相手にしない。巡查の證明書を得て漸く七圓の金を得た。そして菓子屋を續けた。氏の仕事振りを見込んだ或る人が、しきりに再婚をすすめた。この頃七日も湯に入らない様な生活が續いてゐた。結婚どころではないとあつさり辭退した。しかし風呂敷包一つを持つてくる人があるならば世話してくれと頼んだ。

媒介人はそれでたくさんだといふので、日比谷の大神宮で結婚式をあげた。費用六十圓、里方か

ら出してくれた。よし子現夫人がそれである。間もなく夫人の里から板張りの寢所に疊が来た。氏が結婚式に用ひた衣裳は普断着の一張羅であつた。強られて撮つた結婚記念寫眞代督促五回目に漸く拂つたと云ふ有様である。結婚式に出て来た里方の叔母さんが、表から裏に顔が突き出る様に狭い家だと云はれた逸話もある。

### ◇教化事業へ

此の間辛苦十数年。商賣は順調に繁昌を續け、十五萬の資産をなした。この間氏の心には人夫時代の思出が常に去來して居た。たまたま明治四十五年六月救世軍無料宿泊所を見學して、二名の不良兒を、氏の製菓工場に、働らかして見た。怠惰な放縱な生活になれてゐた二人は、職業的訓練と精神修養の結果、當時多數の職工中稀に見る善良な少年となつた。時と所を人を得れば、悪人を善人に歸らしめ、境遇により前途に光明と希望を持ち怠惰者も勤勉な者に變化しうるものだ。氏は痛切に感じ、餘生をこの教化方面に捧げようと、固い決心をしたのである。

社會の生活の困難の度が加はつて、經濟的犯行は深刻化して又増加してゆく。それが少年等の身に及ぼす脅威の影響に熾烈なるものがある。十八歳未満の不遇少年の保護施設は國家將來のため最も急務である。不良兒は早期發見につとめ、同時にその收容施設の充實を計り、他面に收容兒童の勞力限定と相俟つて、少年に適應すべき職業輔導は、從來一家創立に支障あらしめざる生業を選択せしめる必要がある。

この事情に相俟つて、稻永氏は工場に不遇少年を採用することにした。大正十五年九月三十日東京府下西巢鴨町池袋七九九番地並に八百番地に建物五百三十坪を買収して、指導作業所、及び事務所にして、同時にもつばら製品の販路に關する實地の修業をなさしむるために、東京市内神田區柳町三番地に、市内授産所を建設した。此間氏は十有萬の財産を全部従業員に分配し、利益も組合員に公平に分配するの計を立てた其の頃代議士井上角五郎、土井權太、板野友造、近藤達兒、西村丹次郎氏其他農商務、大藏兩省東京府當局は此の計畫に大いに賛成し、大正十一年八月二十日産業組合法による有限責任稻永購買販賣利用組合設立の認可を得た。翌十二年一月總會を開會して總資本に對する六分の配當をなし氏はこの時成功、安心、喜びの頂上に居た。

## ◇再度の火災

其の後間もなく十二年の七月六日に池袋工場及事務所は類焼の厄に遭つた。敷地一千坪建物五百三十坪及在庫品すべてが烏有に歸し、此の損害は十六萬圓に達した。而かも矢つぎ早に九月關東の大震災には其立退先神田東龍閑町及び柳町全部火事に見舞はれた。然し稻永氏は曰く。

『私の事業所の財産は焼失した。震災で他から資本金を借入れる事は現在出来ない。例へ借りとすれば責任が残る。そして今月苦境に立てはゐると雖も私の財産は焼けてゐぬ。私はこれで蹉跎するも、全財産を従業員全部に分配した事は決して消えない。今日勞資の争鬭を耳にする。これは持たないものが持った人にもつゝ多くの分配を請求するからと思ふ。又資本家が勞働者に公平な利益分配をして、勞働者の満足し、これを喜ぶ顔に接するの時の心持ちのすがすがしさを、知らないが故である。』

震災後氏は、再起の不能を知り、少年を解放した。然し彼等は、たちまち身の振り方に困り過ちをなす者が多かつた。

氏は再び池袋に指導作業所、宿舍等を新設し、震災のために解放した少年を收容して、事業を繼續する事にした。

## ◇其の後

偶々時の司法省の保護課長宮城長五郎氏は稻永氏の事業を知り少年保護司を氏に囑託し、且つ同所は司法省の保護團體として取扱はるゝ事になつた。

昭和二年氏の夫人よし子も、その少年薫育の効により少年保護司を囑託せられた。

宮内省よりは大正十四年、十五年、昭和二年、三年この四度事業奨励の思召を以つて内帑金の下賜あり、内務省主管の恩賜財團慶福會よりは二回事業奨励費の下賜金の光榮に浴してゐる。尙司法省よりは事業資金をうけ又大正十三年度より永久的に補助金を受くる事になつた。

特に同事業團體には大正天皇の御大葬に用ひられた、多摩陵の御奉輦舎一棟、庭燎舎四基、硝兵舎一基及び御用材三十坪を下附せられた。これら清屋は至誠學舎屋上に現状の儘輝いて居るのである。

夫婦の保護事業は甚だ少ない。稻永氏夫婦は司法省の少年保護司を囑託せられ、舎は、理事五名に補導員の七名、教師二名で、舎内は自治制布かれ取締一名部長五名その下に班長三名班長の下に伍長三名を置く組織である。

顧問は子爵栗野慎一郎氏、宮城長五郎、植田条三郎、土井權太、頭山滿、平田學の諸氏である。今稻永氏夫婦は心すさんだ少年たちを、愛のあたゝかい懷に抱き、彼等に眞心からしたしまれ、一切の苦を忘れ、言ひしれぬ喜びにしたつてゐる。今後氏夫妻の如き事業が世に益々行はるべきであらう。こゝに氏の健康を長く祈りたい。



高等官からかしわ飯屋になつた  
變り種

元博多驛長 岩倉音熊氏

◇前半生

鹿児島線で博多驛のおつな味がして汽車のつかれもケロリと忘れるほどおいしいといふ評判のかしわ飯は、驛長から會社重役に、重役から飯屋と、二三度くるくし商賣がへした元福岡市會議員岩倉音熊氏の現代式調理場からたきだされるのである。

岩倉さんは住吉新屋に産聲をあげた。嚴父は福岡藩士で仁郎と呼ばれてゐた育ちが育ちだけに飯屋のおやぢではあるが何處かにキリツとした風が見へる。

氏は福岡商業卒業後直ちに九州鐵道の電信技術員養成所に入所修了して遠賀川驛の電信係に採用

元博多驛長 岩倉音熊氏

されたが才氣煥發の氏は間もなく城野驛長事務取扱に拔擢された。

明治二十九年助役となり佐賀、久留米、博多の各驛に歴任した。この間僅に一年といふから並々ならぬ手腕の持主と思はせられる。筑豊線と九州鐵道合併に際し、筑前植木の驛長にすえられ、幸袋、鳥栖の驛長と榮轉が續いた。

九鐵最初の車掌監督制が出来たのでその監督に昇進し門司運輸事務所書記を兼任させられ間もなく博多驛長となり十年間勤績、この間博多驛の改築擴張をして現在の博多驛とした。又出来町の土地買収が不調に終わったので思ひ切つて機關庫を吉塚にうつし吉塚驛を新設した。この忙しいところに三十七八年戦役の軍事輸送に晝夜従事し、明治四十四年長崎驛長に轉任しここでは日獨戦争の軍事輸送にせわしかつた。その功により高等官七等になり勳八等を戴いた。大正四年鐵道界からひいて實業界に投じた。

### ◇實業界に乗出す

太田清藏氏たちと九州自動車會社を起して専務となり又九州日報の博多部販賣もやつたが何に感

じてかにはかに方向を轉じて飯屋のおやぢになりました。それが大正十一年當時は鳥栖と折尾の兩驛に鳥飯があつたが博多にも名物となる鳥飯を賣出したいと決心し現代式の調理室をかまへておいしいかしわ飯を賣出した。

氏はこの事業を右手に左手では地方自治界に抜手を切つてゐる。大正十四年民政派の市會議員に見事當選し昨年春の民政黨ごとくから住吉辛酉同志會を解散して直に戊辰同志會を組織したが千五百の同志が集まつた。氏は同會總務の一人である。

今年五十七の初老ではあるがまだ元氣旺盛で智謀いよくさへてくる。とも角トン／＼拍子のめぐまれた高等官が飯屋のおやぢで納まつてゐるところは一寸福博事業界の異彩である。





漸進主義をとつて遂に日本一の  
綿屋になつた

### 製綿業 原田忠右衛門氏

#### ◇綿屋になる

日本一の優良製品、日本一の大量生産の地位を瀟ら得てゐるおたふく綿は、廣く九州一圓、中國、朝鮮、臺灣、南滿南支に非常なる歡迎をうけてゐる。このおたふく綿の製造元のおたふく綿株式會社の例に吾人は成功に對する漸進主義の効果を明らかにする事が出来る。

原田家は武右衛門氏の子の代に、二つに分かれた。本家は即ち傳はつて現在の福岡日日新聞社營業局長原田徳次郎氏に至つてゐる。

分家の初代は、即ち忠右衛門氏で嘉永四年二月八十兩の金を貰つて下小山町に分家したのである。この人は麴屋忠右衛門と稱して、天保十一年に綿屋を開業した。

忠右衛門氏の子が重吉氏で當氏の忠右衛門氏は重吉氏の次男に生れた。

原田をして今日あらしめた當氏忠右衛門氏は、明治十六年九月十九日に生れた。

重吉氏は不幸にあひ夫人を幾度かめとつた。故に忠右衛門氏には異母兄弟が多かつた。

この中であつて、高等小學校を卒業し、直ちに家業の製綿業の加勢をする事になつた。やがて徴兵検査に合格し、除隊後、當時福岡にふとんやが一軒しかなかつたので、それを開業する決心をしてゐたが、當然家業の製綿を繼ぐべき長兄が、綿屋を嫌つたので、氏が父の跡をうける事になつた。これ氏の二十四歳の時である。

#### ◇機械の苦しみ

家業を繼いだ忠右衛門氏は、舊式の足踏式の製綿機械の改良に専心した。事業の盛大は能率の増進によるから、氏がこゝに着目したのは當然さは云ふものゝ、其處に非凡なる或る閃めきを感じずには居られない。

三田尻に精巧な綿打機がある話を聞いて、氏は直ちに該地にゆき、百八十圓の定價に對して拾

圓の手づけをうつて来た。が後でその機械が思つた程のもでなかつたので、解約し、その手附の十圓を取り返すのに苦心したと云ふ逸話もあるが、これに當時の原田綿屋が餘り樂でなかつたことが知れる。やがて博多の石堂町と、後矢部綿屋に新式の機械が出来たが、到底氏の満足を買ふ事は出来なかつた。

明治四十三年名古屋に共進會が開催された。氏は近所の人を見物に出掛けたが、實に理想的な綿打機を發見し、直ちに打電して八百圓を投じて購入して歸福した。

これは重吉が渡邊龍次郎氏より一時立替へてもらつて送金したものだ。

得意になつて、市中の同業者の鼻をあかしたが、一難されば又一難が、瓦町に藤野製綿所が博多分工場を設立し、原田と同様な新式機械を三臺すへつけた。

原田はこゝに、偉大なる競争者を見出さねばならなかつた。

#### ◇明治末の福岡市の製綿界

明治四十四年原田は藤野製綿に對抗上更に新式一臺を購入した。當時福岡市には大濱に平田龜次郎

石堂に一軒、橋口の武石、吳服町の矢部、これに原田、藤野を加へて六ヶ所の製綿所があつた。

然しその製産高は微々たるもので、市内の需要を満す事が出来ず、多く肥前綿と稱するものが移入せられてゐた。

原田では第一に肥前物を驅逐すべく決心した。故に單に小賣のみを以つて満足せず、卸商を開始し、紙與の糸店に第一番に卸した。そして漸次販路を擴大していった。

大正元年には更に一臺機械を据え、愈々藤野製綿と對抗する事が出来る様になつた。かくて遂に市外に迄卸しをなす能力を示した。

#### 飛躍から飛躍へ

原田では職人は午前七時から午後十時迄働らいた。それでは藤野と同様である。故に兄弟力を合せ、午前の二時から六時半迄、職人の来る前に、家の者が機械を働らかした。

大正二年にはスカツチアと云ふ最新式の一臺、次に又一臺、カードと云ふ機械二臺を増設した。

この間忠右衛門氏は外交もやり、自ら職工として機械を動かし、又店頭に立ち、夜は夜で算盤をこつては、事業の擴張計畫に寸暇もなかつた。

大正六年十一月には、明治町に五百六十坪の土地を求め、在來のものに更にカードを二臺新らしく加へ二萬數千圓を投じて、工場を新設した。が當時資金は之を他に求めたものである。

が大正七八年の好況に出會して、巨利を占め直ちに舊債を返済してしまつた。太田圭助氏の如く期間のある借金を期間前に返済されたのは、生れて始めてだと云つて、その證書を記念のために原田に返さず貰ひうけたと云ふ話もある。

更にカード二臺を求め十臺にし、一萬五千圓を投じて明治町工場の改増築や、敷地廣めやを行つた。大正十年更に敷地千坪を買収した。

又熊本市の本山町に分工場設立の計畫を立て、一萬數千圓を投じて工場敷地を求めた。

#### ◇綿打機買占めの壯舉

當時大阪に於いて、製綿機の賣物あるを聞き何にか感ずる所あつた忠右衛門氏は直ちに全部二十

四臺を買占めた。十五臺を家に残し、強い競争相手の出現を慮つて、残部は一臺、二臺と分賣し、他の一人に機械が集まらない様にした。

十五臺の中十臺が本山の分工場に送られ愈々大々的な擴張の風聞が傳はると、熊本の製綿家間には大恐怖が起つた。そしてその反對運動が起つた。忠右衛門氏は弟吉若右衛門氏とよく談合し、買受の交渉が起つてゐるのを幸いに四萬圓で本山分工場を賣却する事にした。

が同時に、明治町工場の大擴張を斷行した。即ち十七臺の機械は、おたふく綿を、間斷なく作つたのである。

この頃財界の大變動が來た。然し原田では天津に支店を置き直接原綿買入れをやつてゐたのと思惑をやつてゐなかつたのとで、何等の反動をも受けなかつた。而かも次には百斤四十八圓の原綿が七拾圓に騰貴した。原綿問屋が製綿所を開業するを云ふ迄製綿界萬能時代となつた。

大正十一年にはカード四臺、スカツチア一臺十三年に、カード九臺を増設し明治町の敷地を擴張した。

◇原田の現在

製産高の増加と共に、販路が擴大するは言を俟たぬ。

取引客の來訪も多くなる。遂に忠右衛門氏は四圍に喧かましくせき立てられ、盛況裡に辛抱しながら十年間起居した頭のとゞく様な低い天井の下小山町の店を、新築する事にした。

先づ次弟の吉右衛門氏の住宅を作り、次に昭和元年總工費五萬圓を投じて下小山町の販賣部を新築した。これは全部日本材を使用し、始め三萬圓の豫定であつたが、大黒柱を檫に變更した爲めに五萬圓になつたのである。

昭和二年明治町の工場に事務所を造作し、三弟五十男氏の住宅を作り、三年の春一萬餘圓を投じて、上棟式を舉行し、在福諸名工を招いて、大祝賀會を開き來會者二千名を算した。

四年四月一日、原田製綿所の組織を變更し、おたふく綿株式會社と稱し、資本金五十萬圓、全額拂込みである。社長忠右衛門氏、副社長吉右衛門氏、専務取締役平五郎氏、取締役五十男氏、安河内新七氏、監査役に原田萬造、原整造の二氏を選んだ。

明治町の方を本社とし、下小山町を出張所とし、同時に本社の大擴張を執行し、現在カード七十四臺、スカツチア十臺が、喧しい回轉の音響を出しており、尙舊式のふとん綿打器が十五臺動いてゐる。

かくして、名實共に日本一の製綿所が出現した。本社三千坪の敷地に二千坪の工場建物、出張所五百坪、外に三角に五百坪の脱脂綿工場がある。

工場員三百名は、原田の大を致すべく、毎日日々として働らいてゐる。而かもこの上十萬圓を費して工場擴張中である。竣工のあかつきは、機械百臺、職工三百五十名を使用するに至るであらう。

◇原田を守る人々

由來製綿業には専門的の學問をおさめないでも、充分たづさはつてゆける。が原田では専門學校出の人数が働らいてゐる。

本社を采配する平五郎氏は、忠右衛門氏の長女の養子、帝大政治科卒業後、北海道炭礦汽船會社に出たが、五十嵐、平田、兩氏の膽入りで原田家に入つた人である。同店今日の盛大をあらしめた

製綿業 原田忠右衛門氏

天津支店には、原田萬造氏が居り、年額三百萬圓の原綿貿易を行ひ、内二百萬圓は博多木社に送るものである。

重吉氏は、子供に對して、無干渉主義を取つた。

忠右衛門氏の政子夫人は、縣立高女を卒業するや、十七歳にして、直ちに二十五歳の氏の元に嫁し、多くの異母弟等の間に處して、よく平和を保ち、内助の功多かつた事は實に貞女の鑑である。忠右衛門氏が三十七歳迄厚司がけて働いてゐた事も、美しい話草である。

氏は現に博多商工會議所議員の第二期をつとめ、工業部々長であり尙百數十名を擁する九州製綿組合の組長でもある。

吾人は多くの兄弟の協力による成功の一例をこゝに明らかに見たではないか。

### 芽出度い藤翁

△福岡の近郡に姓を何さか云ひ名を「藤金作多田作兵衛」さおやぢから附けられた人がある。その當時、藤金作、多田作兵衛の兩氏が福岡縣の政界で並び稱せられて居たから、倅をあやかしむべくこの珍妙な名を附けたのも親心からであらう。自由黨の發祥時代、今の藤翁が元氣盛りに、縣下を縦横に馳騁し、人をしてその雄風を仰がせた姿が思ひやらるゝではないか。

△時代は推し移つた。世相も思想も激變した。八十六翁の藤さんには生き乍ら既に條栗で銅像となり、名遂げ功成つて芽出度し／＼で其の生涯の幕を閉ぢつ、ある形であるが、本人はまだ大元氣、水茶屋に足溜りを置いて福博の街上に老驅を選び、多種多様の公私の會合にその顔を出すに努める。

△急進派の學者の講演があり、時代の尖端に立つ若き學徒が聽講して居る席上、演壇下の第一列に藤翁の熱心に耳を傾ける姿を見た者は、微笑して翁の努力に感心した。翁の心持では自身がその會合の中に在る事はその會合の意義を大ならしむるものであり、地方長老としての主催者に對する好意の表現であるらしいのである。

△地方開發は翁の終生の念頭である。杉山氏の博多灣築港と因果關係にある大分鐵道の促進は翁の晩年の努力を傾注しつゝある問題で、翁が前回の選舉で政友支部を離れて宮川一貫氏を應援した事情もそこにある。

醸造屋から日本的な

大實業家になつた

貴族院議員 太田清藏氏



◇家訓を守らず

大正十年四月頃銀座の十番地に福岡銀行東京支店建築場の高い板圍ひができた。行かふ人々に福岡銀行とは如何なるものかとの感を抱かせたものである、これこそ今時めく福岡が産んだ大實業家太田清藏氏の東京進出の第一歩であつたのである。

この建造物は銀座の松屋ビルである。階上八階は第一徴兵保険本社、太田清藏東京事務所になつて居る。七階以下が世界的に三越と共に歌はらるゝ松屋デパートである。

この家屋貸賃年額六十萬圓と聞いては地方人には一寸開いた口がふさがらない。

この八階百尺の高所から眼下に散在する群少の銀行商店に君臨して財界に萬丈の氣焰をはく太田

清藏氏は福岡が生める近代的人物の一異彩である。

氏は文久三年八月の生れ同年の九月はその本家である先代太田清藏氏の養子となつたのである。

氏の十七歳の時先代がなくなつて氏が家督相續したのは明治十三年二月で祖父清走翁の後見にて製油肥料清酒醸造業に専心従つたのである。この清走翁は氏にかつて次の如き家訓を與へた。

我家は年來の家業を怠らず正直に守つて行けば、妻子を安樂に養ひ祖先の祭祀を營むにいさゝかの不足もないのである。故に決して今の資産を増殖せん等の野心を起すべからず。高山にのぼらんとすればこそ深溪に陥るのうれいもあるなれ。人は坦途を辿るに及ぶなし。と。

しかし家訓が忠實に太田清藏氏に遵守されて居たならば遂に今日の日本の太田は見る事ができなかつたであらう。

◇實業界に乗り出す

清藏氏の實業界入は筑紫銀行を以て嚆矢とす。當時先代下澤善右衛門氏を頭取として大いに繁榮したが經營よろしきを得ざるものがあつて遂に破産の危機がおそはんとした。太田氏はこの時機野

貴族院議員 太田清藏氏

七平氏と共に之が救済に當り磯野七平氏が福岡市長に就任したので自ら筑紫銀行の頭取になつた。次ぎは田川探炭株式會社に入社したこゝである。しかしこの事業は炭界不況のため妙からざる損失をまねいた。次に岡山紡績の取締役、博多絹綿紡績株式會社資本金六十萬圓これに引續いて博多電燈資本金五萬圓、九州製油資本金十萬圓が氏の發起で創立されておりこゝに氏の實業家としての素質が現はれ來つた。

この内博多紡績は明治三十二年の義和團の亂にたつ能はざる打撃を受け朝吹英二氏によつて鐘ヶ淵紡績と合併したのである。

#### ◇火事に見舞はる

順風を得た如き成功は何處にも發見できない。七轉八起といふ古めかしい例が成功のかけに必ずひそむものらしい。太田氏の事業に愈々油が乗つてきた頃この風運見も遂祝融に見舞はれた。

玄海の波漸く荒からんとする明治三十一年の十月藏本町の家屋改築の計畫なりて、各地より蒐集されたる良材は山積した。この大工小屋より發火して數年の蓄積瞬時にして烏有に歸し倉庫の油類

が下水路を傳ひ博多川に流出し翌日隣人の通知により下水路に停滯せる分をくみみらした油丈けでも實に六十石に達したと傳へられて居る。

この際最も痛快を叫ばざるを得ないのは太田氏が藏本町半町全部類焼者に損害を償却しやうと決心したために貸金を回収し銀行預金を引出して又所有田畑一千數百俵の徳米舉がる田地を賣放つて決心を實行した事である。

火元七代怨まるの諺あり、怨まれたる者は成功なしといふ、然れども太田氏の場合怨まんとして怨み得ないものではあるまいか。

徳義上の責を免れてほつと一息はしたものと思ひ出して見るならば數日前胸裡にえがいた計畫は既にあとかたなき雲霧の如く散じて、今後如何にして昨日の勢ひを挽回すべきか、英雄の心中亂れて麻の如しこはかゝる場合に形容すべき言葉であらう。氏は上京した既に福岡市に於ける公職各會社に於ける重役の如き全部辭任して居る。そして先輩知己に「田園生活に峰の雲、まかきがねの白菊を見て樂むべきか乾坤一擲、捲土重來の意氣を以て邁進すべきか」と歴訪した。然し皆それ位の小蹉跌に氣をくさして隠退するなど君の平素に似合ぬではないか、俗に焼け太りと云ふ事がある

雨後の月光は一層鮮かなるものぞ」と激励した。心機一轉した氏は、「榮枯盛衰は世のならい人はそれを氣にかけずとも唯々活動に活動を續ければよいと、早速歸縣の途についた。

#### ◇安田善次郎氏と相知る

この事件に次いで氏に又受難の時がきた。これ即ち十七銀行支拂停止の問題である。

重役株主代表は善後策のため相たずさへて上京した。即ち金子堅太郎子より黒田家に救済方を懇願した。黒田家ではこれを安田善次郎氏に相談した。この役を引受けた山中立木氏が上京中の重役整理委員に安田氏の面會を要望した所、安田氏はあの銀行をそれまでにして仕まつた程の人に面會の必要なしと、何等の顧慮もなく謝絶した。然る後重役の氏名中に監査役太田清藏の氏名を發見し太田君に上京して貰ひたしと言つた。

太田氏は生命火災の保険の代理店のため福岡に於て安田氏のために活動したことがあつた。この時の交渉に於て、意志鞏固な理財に通曉した太田といふ印象が安田の腦裡にあつたのである。

郷里に於ては百三十銀行に對する氏の個人保證の二十五萬圓のために太田家の財産が差押へられ

たとの風説傳はる中氏には黒田家安田氏としばく折衝を重ねて遂に黒田家の努力によつて安田を動かし安田は百萬圓をたづさへて來福した。安田は十七の重なる預金者を常盤館に招待し、安田が引受けし以上決して預金者に迷惑をかけざることを誓ひ翌日より十七は開店した。

一週間にして以前に劣らぬ人氣を受け十七も百三十銀行も太田家一族も預金者もはじめて愁眉を開いた。

以上の二つの事件が情義理と策の二方面の氏の面目が躍如としてゐる、この時の安田の改革によつて十七銀行の貯蓄銀行が生れ遂に福岡銀行になつたのである。

#### ◇保險業で大成功

氏を談ずる時又忘れてならぬことは徴兵保險のことである。この會社には福岡出身の濱地八郎氏が監査役をしてゐた。社運不振で明治四十二年に衆議院議員として上京した太田氏は濱地の訪問を受けて、その引受方を相談された。當時契約高一千萬圓準備積立金は僅か八十萬圓それが全部固定して居る有様で政府は既に新規募集を差止めてゐた。



然し太田氏は當時の保険課長岡實氏の所見をたゞいて、政府の眞意を知り、東京に一郎をかまへて親しく業務を監督ふることにした。其後君の手に經營するに至るやその業績はぐんぐんとんでいつた。

その後氏は蓬萊生命を故鶴原定吉氏より繼承しこれも頽勢を挽回した。氏の關係會社は日本鋼管鶴見埋築、北海道拓殖、拓殖貯金、日本澱粉、徴兵保險、臺灣鹽業、蓬萊生命、大村灣眞珠、博多灣鐵道、北九州鐵道、筑前參宮、電氣製鐵、日本共立火災、日本耐火、十七銀行、九州勸業、渡邊鐵工場等の數へ來れば限りない多くの會社銀行の取締役、監査役、相談役又は社長である。

### ◇福岡市と太田氏

太田氏は我國に市制しかれし明治二十二年二十六歳で福岡市會に出て居る。其後幾度か再選せられ又博多商業會議所議員も創設最初に當選し明治四十一年衆議院に推される迄會頭副會頭として働いて居る。衆議院議員を只の一期で辭したのは總ての實業家がそうである如く自分の生命は實業にあつて政治にないことを明確に認知したによるのである。又反面に群馬縣で敗戦の苦酒をなめた鶴

原定吉氏をあげんとした故であると傳へられて居る。現在は多額納税の貴族院議員である。

氏は福岡市に對して如何なる希望を有して居るか。簡單にいへば福岡市をして東京の如き都會ならしめんといふのである。換言せば福岡市をして帝都ならしめんとする意圖を有するのだ。

氏は明治四十一年衆議院議員にあげらるゝや博多灣國港指定運動を起したものであるが、先輩は時機尙早しとなし一笑に附した。しかし現在に於ては博多港は第二種重要港灣の認可があつて居る、この氏の博多灣國港指定運動の起因には面白いエピソードがある。

日露の役の講和がボツマスで行はれた際當時の米國の政治家タフト氏は小村全權特使に對して筑前に西戸崎といふ日本無比の良港があるときが事實かと質問した。しかしそれに對して知識なき小村氏は返事に窮した。歸國するや外務省をして博多灣を調査せしめたのである。しかるに調査なかばにして小村氏は死去しそのことは自然立きえとなつた。

日本人が未知だつた事を米人が知つて居る。ここに着眼して太田氏は國港指定運動を起したのである。やがて博多灣鐵道は氏の手によつて完成され西戸崎の築港も氏の資本によつて築成された。早くよりこゝに着眼した米國はこゝにライジングサン石油會社の工場を作つたのである。この小築

港に四千噸級の船が横づけし原油タンクまで三百間ハイブで荷あげして居る。

現在に於て横濱はあまりに東に過ぎ神戸は瀬戸内海を經過せねばならぬ不便がある、關門は二十四時間中三分の一しか荷揚げができない。しかるに荷揚げは可級の敏速なることを尊ぶ。

博多港は二十四時は二十四時荷あげすることができる。若し人工を加ふれば博多灣が無類の良港となるは明かである。人工とは金である。太田氏はこの點に考へ到つて福岡に於てなすべき大なる事業を完成せしむる決心を有してゐる。

氏はよく知人に「太田は死なれない残す事務があまりに多い」と語る。事實完成すべき事業を有すれば石にかじりついても生きねばならぬのは道理である。

氏の事業外の生活は朝における佛前の讀經であり淨瑠璃である、この淨瑠璃は氏は若返のためにやつてゐると云ふ。然しそのみでなく浮薄の現代で、昔日の義理人情のしがらみに泣き喜ぶ風情が大きき氣にいつて居るため又その爲に體の健康に益があると云へば一舉兩徳といふものだ。その間全く世事を忘れてうなる世界に我を没入せしむるからでもあらう。しかしこれが前述せる如く長らく生きたい長く活氣を維持したいといふ老ひんとする太田清藏氏の若返り法であることを最も

重要な原因となすべきである。

### ◇新しい富豪

時代の變轉は豪華な生活にあく實業家も、下層民とよもに物質的には兎も角も内心的に泰山の安きに居る氣分を失つてゐる。それには又由つて起るべき因果はあらう。しかしこの世の事業は百人千人の政治家雄辯家よりも、一人の實業家の無言の實行によつて成就すべきものゝみである。貧困者を救ふ者が貧困になる原因を説くものでなく、又貧困を除くことを研究する人でもなく唯一片のパンを授與へ得る人である。徒らに蓄積に蓄積のみに没頭することは少くとも現代において賢明なるものゝ取る策ではないと思惟される。事業は一世の痛快事ではある。しかしその事業の蔭に、溫情が流れてゐなくてはならぬ。出でたるものは歸るといふ卑近な例ではあるが、こは實業家によく考慮を求むべきである。

實行家タイプの變移、明治末期大正年間を通じて、安田善次郎、乾新兵衛は最も代表的な人物であつた。半面に幾多の批難はあつたが、その強固な意志は萬人の深く心に銘して手本とした所であ

る。

しかしすべてが少しづつ書かへられて行く時に米國にヘンリーフォードが出で、最も現代的な人としての實業家タイプを示してゐる。これは社會善導のため現今日本のこのみちのものに一つの標識であり得る。

富豪の手によつてのみ成就し得べき、しかもそれが最も効果ある社會事業方面の仕事はいくらしてもしきれない程である。従前はこれが多く不生産的な方面に使用された。しかし現在は生産的事業で慈善事業として富豪に期待すべきものが多い。太田氏がこゝに着眼され、五十萬の基本金を持つ太田家報徳會を設立し報徳會の事業としてすでに職業紹介をなし近く隣保館新築の計畫あるは近來の快事である。



大學病院と競争して開業した

福岡市小兒科の草分け

醫師 故 小 野 重 喜 氏

◇政治すきの醫學生

國會に十三人、福岡縣會に三人、福岡市會に一人、これは醫者畑出身の政治家で市會に一人が即ち古門戸町の故小野重喜先生であつた。

お醫者も病氣を癒す事よりも金をもうける方が餘程大切になつてくると、病院の前を安ピカ流に飾り立てる事に頭をひねるが、政治が最高の道徳である事などてんで考えないのが普通である。變態的生理のみを研究して、眞善に遠ざかつた生ものに接近した生活をしてゐる故に、社會の病原によく目がつく筈であるが逆で數學や生理解剖できたえ頭は社會の機能解剖に迄其儘役に立つとは云へない。

醫師 故小野重喜氏

小野さんはしかし、生來の政治好き理論抜きに政談に興味を持つてゐた。水の都、柳河の傳習館を出て東京の長谷川康の立てた濟生學舎に學んだ事は、一種の誤りであつたかも知れぬ。もし帝大の豫備門か早稲田にでも入學してゐたら、今頃小兒の手を握る事などなく、「そも／＼我が田中内閣の對支外交は」とやつておらが内閣を謳歌してゐる代議士になつてゐたであらう。

川上晋次郎一派が壯士芝居で當てゐた頃が小野さんの醫學生時代で氏等は短衣をまとひ袴は白、しかもあかじみて頭髮河童の如く、稱して濟生學舎の白袴隊といひ都大路を濶歩して九州青年の豪膽振りを發揮してゐた。流石の江戸つ子も少々あきれはてし、垢ぬけしない無鐵砲には、普通の頭ではその被害の程度の推測が出来ず、さはらぬ神に崇なし、喧嘩で勝た處で相手は田舎出の書生負ければ江戸つ子の恥と勝手な理窟をつけて、お江戸のごろつきも白袴隊の前には道をさける。そして遠慮をして敬遠された。

勿論小野さんもこの隊士である。喧嘩ならそらゆけ、さて吉原遊びかと音頭取つて塾から練出した事もある。痛快な事績きでどんな事があつたか記憶がない程である。然し遊びが猛烈であつたと共に勉強もひどかつた。

今日程死體が手にいらぬ昔は解剖の時朝は四時から夜は八時までぶつ通しに腐臭のする一室で本とノートを比較して暮さねばならぬ日があつた。湯もなく冷水で血のりをあらつて、パンにかじりつくなどの、聞くだにぞつとする學生々活の反面もあつたわけである。

長谷川氏は内務省の衛生局長をした人帝大なんかに盛に罵聲をあげた傑物で、二千人の學生をそつちのけして政治に熱狂したりした人であるが、小野さんは校長にひどく私淑した。尾崎など當時鳴して居たが小野さんはそのきざな態度が氣にくはなかつた。

#### ◇帝大の學制が氣に入らず病院を退く

卒業後聽診器と白い手術服を着けて、福岡縣立病院の先生になつた。勿論小兒科、しかし縣立病院がやがて京都帝國大學九州醫科大學附屬病院となると、學制、院制盡く氣にはなかつた小野さんは、明治三十六年四月一日醫科大學の創立と日を同じくして現在の古門戸町に開業して大學と競争(?) (小野さんは阿々大笑しながらそう云つた)を始めた。

現在醫者で一ヶ月千六百圓を稼ぎ上げる程はたらくと、どんな精力のある人でもペンシズムに取

りつかれて世の中が面白くなくなる程つなれると云ふ。しかるに醫者一代にして莫大な富をつくるのは、否堂々たる病院を新築するのは、株をやるか、土地を買つてあたるか、高利貸をやるか、より他にないとは、若い醫術のみ熱心な者の言葉である。小倉近傍のお醫者で、競馬に二三百圓位の勝負をしないものは一人もなかつたと云われる程、金ずきであるこの階級の小野さんが、切角先祖から譲られた財産なんか少なくなからうが増さうが氣にかけず収入が増減しやうがかまわずに、福岡市會に乗だしたのは、市内の醫者が一向にこの方面に活躍しないのに憤慨したのも一理由ではあるが、生來こつちがすきであつたからである。

#### ◇市會議員としての小野さん

小兒科では福岡市で押されぬ古顔、市會には十三年間議席を占めて居た。大いに辯じたる事もないが、缺席して居る事もめつたになかつた。圓滿居士の綽名を持つて居た、この小野さんの八方美人振りにして、尙政敵を作るといふから政治はおそろしい。民政系のお神さんなど小野さんは政友會でしようかなど亭主を煽動して、小供の病氣などの折電話を他所にかけるなどあるのには閉口して居た。

て居た。

始め中立で市會に打つて出たのだが附近に太田清藏、太田勘、木梨氏等の政友の歴々あり、夫人の博多幼稚園の關係で遂政友會と切つてもきれなくなり遂副議長所に祭り上げられたのであつた。前には縣會に四圍に押されて出馬したが落選の憂き目を見た。故にかさあらぬが、縣會はつまりぬ切角出るなら國會だと小野さんはよく云つてゐた。

昭和三年度の豫算市會で記者團に騒がれて小野副議長失言問題などと揚げ足をとられたがあつさりことわりですんだ。内心一向無頓着、理窟は云つたつて解らない、解かつたつて次ぎに解らない新手が押しよせて失言問題は重大化せんとするなど書き立てるからうるさくて仕方なかつたのであつさり陳謝した迄だと氏は公言してゐたが、柳河の親戚からはどんな事を仕でかしたのだろうと電報が飛んでくるやら、人間が車で馳けつけてくるやら内面随分閉口したらしい。

後には少々市會にも飽いたらしかつた。しかも醫師側から決然立つて市會に出てくる者がなく、已むなく、議席にあつたらしい。後輩を三四人あげて元老として坐角力をして見たいと云ふのが氏の理想であつた。體の都合で酒と煙草をすつかり中止した理由は、夫人の婦人會方面からの運動で

禁酒令が施されたのが眞實かも知れぬ。しかも甚もよして居たから圓滿の上に聖の字を加へねばならなかつたであらう。

由來小兒科には政治家が多いが、小兒病の由來する處が政治によらなければ治療のメスがとどかないためでもあらうか。然し残念な事に氏は本年正月早々長逝してしまつた。福岡市會で氏の圓滿振りに接する事は永遠に出来ない。

然し特に福岡市民の子の親として、氏を忘れる事の出来ないのは、氏が乳兒の努責に就いて研究し、胎毒により肝臓が肥大し腹部を壓迫し、ために努責（りきみ）が起り、それが脱腸の原因となる事を明らかにし、胎毒を治療する効驗あらたなる藥品を發見し、福博の幾多の小兒をこの努責から救つたことである。同家ではこの薬を家傳藥として發賣の出願中である。又病院の方は氏の愛甥の醫學士小野三七雄氏（元大牟田市三井病院小兒科部長）が繼いでゐるが、先代と同じく評判がよい。

### 髯大熊の仙骨

△世の中がますます／＼セチ辛く、人は年中師走のやうな氣持で鐵砲玉の様に飛び、金名譽、色戀の我鬼道に陥つて神經衰弱の度を加へ、心からのゆさりを持つ者がたんと／＼少くなるこの世紀末の生活地獄の中で閑雲野鶴の境涯に悠々々々嘯き得るものはやつぱり達人の類とせすばなるまい。

△大熊淺次郎君は老ひるにしたがつて益々仙骨をおびてくる。老を象徴する肥の長髯年々共に白く、苦勞の皺もよらぬその童顔はますます福の神に似てくる。かれは今多く公事にたずさらず持前の史癖を慰さむべく古文書の持寄會などに出かけて閑をつぶす、その世塵を断つて悠々自適する様は何さなしに慕はしい面影だ。

△昔は博多で第一番に洋行した新智識で、會議所の書記長として中洲時代は鳴らしたものである。當時から一種脱俗の風格をそなへ、瓊々たる俗世間のこまに超然として天下を大觀するといふ流義だつたが、杉山ホラ丸氏が中村精七郎氏をして博多灣大築港を計畫した頃は、かれも一生懸命になり、骨をおつたものだ。

髯大熊の仙骨

五九



魚の行商人から福博一の料理仕出屋になつた

やま利主人 落石鹿吉氏

◇六歳から行商に出る

分業は産業革命の産物であると言はれてゐる。この分業は家庭の茶飯事に迄影響を與えてゐる。もつと前述は博多の客を招待する場合にも、自家備付の膳碗に、やとつた料理人の手になつた御馳走をもつたものである。然し唯今では四五人の客にも料理仕出し屋に應分の注文をなす様に變つてゐる。

博多のやま利といへば福岡市中の數ある同業者の中第一に指を屈するべき大店である。諸官廳を始め各方面の宴會山笠の打あげ、各種の寄合婚禮などの御用をつとめ、其の繁昌他に比肩するもの

なしと迄いはれてゐる。やま利今日の盛大をなした蔭には當主落石鹿吉氏の涙ぐましい程の奮闘美談がひそんでゐる。

落石鹿吉氏は明治五年十二月十一日博多の芥屋町の白水利右衛門氏の六男として生れた。

鹿吉少年は五六歳の頃寺小屋式の教育を受始めたが、それと同時に魚の行商をしてゐた嚴父が死去された。鹿吉氏の受難は實に六歳の時からである。

母の相手となつて家計の助けをしなければならなかつた六歳で天秤棒をかついでタラわた賣りに出た當時博多ではどんな大家の小供でも行商に出した。とはいふもの、鹿吉氏の場合想像するにも餘りにいたゞしい。

月日は進む。然し氏は行商をつゞけた。やがて體が大きくなると魚賣りになり、十六歳迄母を助けて貧苦と戦つた。

十七歳の時博多中島濱新地にあつた丸屋精米所に通勤し始めた。朝七時から、夜八時迄働いて、日給八錢、一人前の男で十七錢貰つてゐた時代である。

徴兵検査にも美事合格し二十四聯隊に入營した。母思ひの氏は日曜がくるのが待遠かつた。一日

やま利主人 落石鹿吉氏

僅かな額だけを支給される手當を貯蓄して、その金を母に渡すのが楽しみであつたのである。當時母堂は豆腐を作つて蒲鉾屋に卸して生計を立てゝゐた。

除隊後の勞働は随分はげしかつた。午前一時床をはなれて母上の豆腐製造に加勢した。

#### ◇落石家に養子になる

氏の仕事振を見込んだ落石榮助氏及イノの兩氏は、鹿吉氏を養子に迎えた。落石では中對馬小路（現やま利より四五軒濱の方）にさゝやかな生魚店を開いてゐた。鹿吉氏の夫人はカネと云つて、落石家の親族先の秋月藩後藤沖右衛門氏の三女で、早く同家に養女にきてゐた。鹿吉氏はこの後養父の利三郎氏に連れられて、毎日舊魚市場に買出しにゆき、福博市中の一流料理屋や旅館を行商してまはつた。

この落石の前に竹田屋と云ふ作り酒屋があつた。故に場所を利用して夫人はこゝに魚屋兼仕出屋を開業した。これが今日やま利盛大の大もとである。

#### ◇講金で店の改築

鹿吉氏は三十歳の時、千圓講に半口加入したが、幸運にもすぐ當籤し五百圓を手に入れた、近所の先輩の意見では「二階で飯を食べる様にしたが一番よい」との事だつたので直に五百圓を投じて店を改築した。この頃魚行商の鹿吉氏は福博一流旅館、料理屋の大部分を得意先にする事が出来た。大正元年だつた。店は漸次繁昌して來た。幸ひ隣りの百二十坪の空地をかりて座敷を新築した。そして愈々仕出し料理屋専門になつた。

#### ◇仕出し屋の基礎をきづく

大正七年借地の期限が切れた、地主の要求に應じて地を返さねばならなかつた。幸ひ現在の所の百七十坪が十七銀行から賣り出たので早速買ひ求めた。

請負業岩崎組の主人元次郎氏はよく鹿吉氏の人物を知つてゐた。故に義侠的に一文の金も取らず一萬數千圓の建築をなして、費用は出來た時拂ふ様にと激勵した。



この新築に移轉したのは大正八年八月で、これが現在のやま利である。

### ◇幸 運 來

氏の多年の苦闘はむくひらるゝの日が來た。大正八九年は戰亂のあとをうけて、博多は空前の大好況を呈した。筑豊の炭鑛で一穫千金の幸運にめぐまれた連中は、博多に長夜の宴を張つた。博多の町の夜は絃歌と薫酒の香りにとざされたと思はれた。九年正月の如き、やま利では毎日客室滿員の大盛況を見た。

これより先大正六年の陸軍大演習の時は外國觀戰武官の魚類の用途をつとめ又最近では御大典の地方賜饌、福岡陸軍饗饌、對島陸軍饗饌などの御用をつとめてゐる。

昭和三年九月二十八日秩父宮殿下の御婚儀の日など一夜七組の婚禮の祝儀料理に應じてゐる。これなどやま利繁昌を示す一例である。

### ◇やま利の現在

やま利がさん／＼拍子に今日の盛大をなしたのは、時を得たにもよるが主人鹿吉氏の性格による事が多い。成功すれば人は道樂にふける。氏の場合實に料理に働く事が趣味であり道樂である。今日でも毎朝自ら魚市場に買出しに出る。歸つては雇人と共に板場にたつて庖丁をにぎる。初對面の人

は誰が主人か別らぬ位である。氏は又日清日露の兩役に出征して勳八等をさづけられてゐる。名實共にうまく、やすく、と一貫して努力してゐる點は、たしかに氏が非凡の人物である事を示してゐる。やま利は現在三百數十坪七十疊の大座敷はじめ大小十有餘の客室を有し、數萬圓の建築費が追加されてゐる。

### ◇その一家

氏の家族は長男榮吉氏夫妻(三三)次男繁太郎氏(二三)三女春子(二〇)と榮吉氏に出來た七歳の愛孫主人夫妻仲居七人板場七人女中五名の大家族である。

榮吉氏は近衛歩兵の第二聯隊に入營し後は在郷軍人會博多西分會の世話役であり、繁太郎氏は大村四十六聯隊に幹部候補生として成績がよい。一家から三人の軍人を出すこゝは又實に光榮の至り

である。

今氏の財は十数万圓に稱せられてゐる。一口にこそ十数万圓といふが赤手にして身をたてこの財をつむことは凡庸のなし能ふ所ではない。少年時の行商に、兵營内の孝心に、青年時代の勤勉に又現在料理に對する氏の精進振には成功するにはかくあらねばならぬといふ幾多の生きた教訓を發見することが出来るではないか。



子守などの辛酸をなめて

福博一流の裁断師となつた

洋服店主 渡邊潜藏氏

◇時流に棹して士族が洋服徒弟へ

福岡市上名島町の渡邊洋服店主主人潜藏氏の立志傳的生涯も亦面白い。成功は向ふからこそ、此の方の手で捉へねばならぬ事が、こゝにも教訓として後進青年に示されて居る。渡邊潜藏氏は明治七年一月大分縣臼杵町に生れた。父は唯江と稱し臼杵藩士當時の赤鞘組と稱ゆる急進組の隨一、イの一番に斷髪した變り種である。着眼する處凡流を抜き維新到來して、主藩公の封食を去るや、米穀野菜、日用品、湯屋を開き以て、他の無爲にして賜金を遊食する時、既に確なる生業を營んだ。然し潜藏氏の七歳の折唯江氏は逝去し、一家は悲歎にくれた。然し潜藏少年は風雨の日となく村熟に通ひ

洋服店主 渡邊潜藏氏

十二にして既に山陽の外史を暗した。豊後の日田の當時郡長の官職にふつた伯父の許に氏が書生として住込んだのは十三歳の時であつた。當時博多中島町の香具屋洋服店主大塚氏（先代兒島善次郎氏弟）が伯父の宅に注文取によくきたが、氏の伯父は世の漸次歐風化する時流を察し、洋服業の將來益々有望なるを看取して、祕藏の愛物を大塚氏に托して香具屋に弟子入せしめた。伯父より給せられた五ヶ年分の衣類夜具を持つて博多に來つたのは、潜藏氏の十四歳の折である。當時長多の洋服店は河内、岩權、柴田、佐々、香具屋の五店で、弟子は箱崎放生會に四錢、ドンタクに二錢の小使を買ふにすぎなかつた。十六七歳の頃迄一方に裁斷の腕を磨くと共に子守や、おしめ洗も命ぜられてゐた。

### ◇修養時代

明治二十二年若松港が開かれ企業地としての有望なる事が先見の明ある人々に着目され、大塚氏も博多より職人を引連れて中島町の洋服店を仕舞、饅頭屋を開くべく若松に去つた。こゝに於て氏は再び行李を負つて甘木、日田を経て五日の歩行の後漸く白杵に歸つた。然し一旦定めし職業を空しくして平穩なる故山に起居することは有爲の材を抱く氏には耐へられない苦痛であつた。奮然

志を立て、京都に出で寺町通共進堂洋服店に腕に益々磨きをかくべく入門したのは其後まもなくのことである。當時共進堂には五人の職人があり其間に伍して三年間研究怠りなかつた。十九歳既に獨立し得る技術を得て得意然として大分に歸省し、博多河内洋服店支店に流行子の職人として勤めたのである。當時洋服三ツ組で十三圓より十五六圓で工賃上着六十錢、學校の先生の月給六圓、これを現在に比すると時代の變遷が恐ろしき迄明白に感ぜられる。氏は仕事に専心、日夜努力を重ねたが、世は一般的に不況、如何にも仕難く二十二の折氏は再度京都に上つた。翌年橋口町岩權洋服店（今の豊國火災の處）に職人として住込んだ。當時の職人は特に江戸前氣分が強く、宵越の金は使はず、遊びもづい分派手にやつたものである。しかし氏はこの間襟を縫ふ針一つにも注意をかさず研究益々精密に腕は日々上達した。

### ◇愈獨立へ成功への一路

二十四歳の折に氏は箕子町に二間々口の家を借獨立開業し夫人をめとつた。開業の當時は岩權から受けた勘定十二圓内五圓敷金二圓の家賃を拂ひ、資本金實に五圓であつた信用は日々に加はり

顧客は増加して店舗狹隘を告げ簀子町二ヶ年の営業の後、上名島町（現在山田醫院の處）に移轉し既に弟子三名を養つて居た。時代は進み、風俗は變る、洋服時代が現出したのである、洋服をきることは頭の進んだ證據であり紳士たるの第一條件であつた。日露戦争は突發する。夜晝もなく働いても注文は輻輳する。いくら職人を入れても益々仕事は多くなる有様で明治四十二年現在の場所を買求めて改築移轉した。築いた基礎はゆるがぬ。その後も營業は順調に進み、大正七八年の頃の好況に又巨利を得て、福博洋服業界に牢固としてぬくべからざる勢力を扶植した。大正四年より十一年の間に福岡縣下全部の警察の六割の官服を請負ひ會つて期日を間違へたことがなかつた。こゝに氏の誠實、責任觀念の強いことが判る。現在も客本位にして繁昌他店の比にあらず、弟子十五人、職人七人、帳場外交六人を擁した福博屈指の大洋服商である。家族は潛藏氏夫妻、長男利昌氏新夫妻四人で親子むつまじく業務の發展に協力して居る。重なる顧客先は十七銀行、男子師範、九大その他出入の學校會社は枚擧にいとまない。昭和二年三月には博多片土居町に支店をおいて、既製品の販賣をはじめ、こゝも日々繁昌して居る。氏はその人格の力により選ばれて福岡洋服商工組合長に任せられ大正十五年九月より今日に及ぶ、又九州洋服商聯合會副會長にて上名島町の總代におさるゝこ

三十年の長きに至る。氏の博多に初めて來りし頃洋服店はたゞの五軒にしか過ぎなかつたか現今では組合員七十二名、しかも氏は本年五十六歳、その活動は將來に待つべきものが多い。去る商工會議所議員改選には洋服組合及び町内に推薦せられ出馬し美事當選し商業部の委員にえらばれた。氏は業なつた。後半世に社會のために盡力するといふ。



毛筆製造家にして  
緑綬褒章を授けられた

平助筆本舗 河原田平助氏

◇河原田家製筆

河原田復古堂といふより、平助筆本舗と呼んだ方が、我々にはより印象深い。肖像入りの商標を不思議にながめてゐた少年時代を回想して、今その平助氏の來歴の紹介をなさんとす。隙ゆく白馬の足早きに感又新なるものがある。

當主河原田平助氏は慶應三年四月三日生れて本年六十三歳、嚴父平助氏の長男で幼名を安次郎と呼んだ。次に平次郎と改め、四十五歳父平助氏の隠居と共に襲名して、平助と稱した。三代卯の年生れが續けば其の家は繁榮するといふ古諺がある。が不思議河原田家は當主、先代、先々代ともに卯

年生れで祖父の如き卯之吉と名乗つたほどである。故にか古諺は立派に事實となつて今日麴屋町に和漢洋折衷の株式会社河原田復古堂が嚴然としてあるのである。

當主はその幼時冷泉校前身の大乗寺小學校東長寺學校覇台北校を経て十四歳卒業した。この覇台とは支那音の博多の意味で、當時市内に覇台南北とあつた。これが現在福岡市小學校の濫觴といふ。小學校卒業後氏は直に家業の製筆に従事した。

河原田家の祖先は遠く豊前の國河原田城主前田左京太夫清助にさかのほる。その後裔の河原田五郎兵衛が、博多に於いて製筆の業をつかさどり、令名があり、文龜永正の頃博多行司にあげられた。其の後製筆業も一進一退の状況を持続した。先代平助氏が安永の初年に至つて大いに家業を興し、研究を重ねて發展の素地を作つたが當代の青年時未だ微々たるものに過ぎなかつた。當代は長ずるに従つて外交方面にも出た當時筑前の製筆は材料の竹が品質がよく且豊富であつて又獸毛も筑前ものが一番よかつた。この關係で材料の竹軸や獸毛を京阪方面に卸して、歸路には其の金で文房具を仕入れて歸つた。當時福岡には京阪方面から文房具を仕入れる處は一軒もなかつたのである。後には販路を東京方面に擴張して東京大阪間の文房具の仲介賣買なごもやつた。

かくて平助筆は筑前、博多織ともにも筑前の主要産物の仲間入りをする事になった。

### ◇平助氏の筆の研究

明治の始め福岡には十四五軒の製筆屋があつた。行商人は博多で筆を仕入れて有名な商標を勝手に貼付して九州を賣捌き廻つたものである。したがつて偽物が多くなつた。先代は此時偽物豫防策を講じて肖像入りの商標を筆軸に貼附する事を考案して、寫真機械を買込で鶏卵紙に硝酸銀の溶液をひいて印畫紙をつくつて家庭の夜業として商標を作つた。これで偽造品が掃かれて聲價は益々高くなつた。これは明治十年頃である。勿論中には商標權侵害などの裁判沙汰も起つたこともあつた。

筆の研究として面白いのは竹の防蟲である、縣の農林課の島村といふ技師に何とかよく防蟲は出来まいかと相談すると、では樟腦油に浸してはどうかとあつたが河原田では既にそれは試験済みであつた。竹に甘味があるから蟲が食ふのだといふので、せんふり（にがい藥草）を煮出してそれで竹をたいてみた處効果はあつたが、更に胡辛で煮たらさすがの蟲も閉口して完全に防蟲が出来たの

で大いに當局の賞讃を博した。時々河原田が胡辛の買占めをやるので、事情を知らぬものは外國に輸出するのだと思つてひそかにその取引先を調べたりしたといふ話もある。

毛筆の外國輸出はそれがブラシと同視されるので検査が大分嚴重であつた。然し植物性のもので完全に防蟲が行はれてゐることとて容易に輸出も出来る事になつた。

在來の筆の缺點は穂がぬけることである。從來の如き小刀の手工ではどうしても欲込不完全で脱穂が多い。大正四年頃扇風機が多く各家庭で用ひられることになつた。その扇風機を中心に小刀を結んで細工するさうでも便利であつたので電動力を使用することになつた。其の後平助筆使用中脱穂軸割れ等の批難は全くなつて、東京泰明小學校の如きは平助筆が他と比較して三倍の耐久力があることを知り、一時に四千本づゝの注文をなしそれが今日迄つづいてゐる。

先代も當代も多量生産よりもむしろ優良品をつくり生産高は現状維持をとる方針を取つてゐる。製品は先づ平助氏の嚴重なる検査をへる。人を使へば検査に情實がともなふ故に決して人にまかすことをせず、不合格品はどん／＼處分してゆくの、平助筆の名聲の永く維持さるゝゆえんも一半はこゝにあるのである。

## ◇筆を以つて宮内省御用達になる

大正十一年、皇后陛下の九州行啓があつた。當代平助氏は金子堅太郎子爵を経て御獲鹿の御下賜を願つて、幸ひ十一年雲が畑の御獲鹿御下賜の光榮に浴し、葉山御用邸に於いて大森皇后太夫に製筆の楷梯の御諮問に答へ、謹製の筆を献納した。又鹿毛恩賜を記念とするために御獲鹿関係の高位貴顯の人に鹿筆を捧呈した。

筆質の優良のため其の後宮内省より御用命があり大中小と指定して來た。大正十四年二月日光山御獲の鹿洞御下賜の恩命に接してより以來宮内省納品には光山と筆銘する様宮内省關係の高等官より希望があり、遂に筆商を以て宮内省御用達となり、門鑑をいたゞいて宮内省に出入自由の榮譽を得たのである。又大正十五年には、資性篤厚夙に祖業を繼承して製筆業に従事し、組合を組織して粗製濫造の弊を矯正し、原料を精選して製法の改善に努むる等、銳意斯業の改良發達を圖り、又鉛筆製造株式會社を創立し之が經營に任じ、多年文具商工組合長としての斯業の進展に寄與せるものある等、洵に實業に精勵し衆の模範たる者として、勅定の綠綬褒章下賜の恩命に接するの光榮を忝

にした。かくの如きはたゞに河原田家の名譽のみならず又福岡市民としての名譽である。

## ◇復古堂の繁昌

昭和元年復古堂は組織を株式會社にして資本金五十萬圓半額拂込、當主を社長とし、專務長男平次氏、常務は長女カメ女の養子平八郎氏であり、次女千代女には平十郎氏、三女カヨ女には當主の甥平三郎氏を迎えて尙キヨ女、健二郎氏等七人の子女がある、又當主の兄弟としては男女七名あり妹婿の平藏氏は紙商を令弟平吉氏は婦人小間物をあきない一家一門皆さかえてゐる。

大正八年に同社は工場を博多驛裏明治町に設立し一千五百五十坪を敷地として參百坪の製筆工場インキ工場をつくり又大正十三年三月には平八郎氏を社長とする東邦鉛筆株式會社を設立して、明治町に工場を新設して之又製品優良の故を以て至る處好評を博して目下滿洲方面に輸出してゐる。河原田家の祖先は博多馬場新町に於いて製筆業に従事し五代目が麴屋町にうつり、當代によつて今日の大をなしたものである。

復古堂の由來をたづぬるも又面白い河原田家は代々黒田家の御用命を辱うしてゐた。天明年間に

黒田齊隆公が河原田の由緒を聞いて當時書道師範の二川相近翁の揮毫になれる復古堂の稱號をたまはつたものである。

復古堂の各地博覽會品評會での受賞は實に枚擧にいとまない。主なる者のみにて四十三回、明治四十三年の如き日英大博覽會にて名譽金牌を受けてゐる。當主平助氏は審査員を拜命すること十六回、宮中及び各宮家よりの御買上献上は宮内省御用達の關係上いはすもがなである。河原田謹製の筆にて色紙に御宸筆を加へらるるなど想像するは、恐れ多けれど福岡市民として無上の喜びを禁じ得ざるものがある。

### ◇春吉の別荘に趣味生活

公職方面を見るに、又枚擧にいとまないが、其の重なるものを擧ぐれば、明治四十二年より大正元年迄博多商工會議所議員、大正二年より六年迄福岡市會議員などの經歷がある。麴屋町の現店舗は大正十五年九月十五日起工約一ケ年の日数を要してゐる。九大の倉田技師の設計に當代の創案を隨所に加へ、監督の倉田技師が更に按配して、大工頭梁の渡邊勘兵衛氏が充分腕をふるつたもので

ある。和漢洋を折衷した表二階裏三階の鐵筋の建築である。現在當主平助氏は春吉三番町の別邸に趣味生活を送つてゐる。多くの名士より送られた書畫の中に起臥してゐるが店の監督をするのは従前通りである。氏は性圓滿無碍寫眞術の如きは非凡の腕を有すると傳へられてゐる。

昨秋御大典に際して福岡の脇山村が主基齋田に選定せられた。主基殿の屏風の繪のため山本春舉畫伯又地方歌のために、宮中御歌所寄人阪正臣の二氏が來福せられた折の如き、筆の因縁によりてか同氏の別邸を宿所にして、那珂の清流を觀賞したのである。風流の宿に風流の士來る又何の不思議がある。が然し同家にこつて此上もない光榮であらねばならぬ。光輝ある昭和帝の御大典と同家がくしき關係を有するに至つたことは綠綬褒章とともに同家百年の後迄よい話草である筈である。筆を以て天下に名ある河原田平助氏を紹介したことは又筆とるものの何のくしきめぐり合せぞ。漫然と世を見つむる時、誰れか製筆に致富の道あるを想像しやう。然るに河原田氏は事實を吾人の眼前に提供した。世に滿つる何物にも、その進む道をうれば廣い天地が開けてくるのである。行づまりの言が、青年の口より發せらるべきものでない事を、特に氏の過去に學ぶものである。



### 河内氏の再起如何

△河内卯兵衛君は今何をして居るか、さいふ事が博多の人物談を試みる席でよく話題になる。彼が大正九年頃の材界のストムに見舞はれて以来、事業界の中心から遠ざかつて久しく、消息があまり世間に聞こへぬからだ。

△博取の荒津内閣に理事長さして時めいたのを最後に、近頃は多年心血を注いだ参宮鐵道の社長もやめて、専ら内政を整へるに没頭して居る彼、果して捲土重來の機會あるか如何。彼の眞骨頭を知る者は、彼の復活を期待して居る。

△彼の豪闊らしい人物の型は人物乏しき、博多土着人の爲めに

氣を吐くものだった。何かなしに大きな事が好きで、本業の絲屋は唯だ世過ぎの爲めであり、早くから大福岡市の將來を達觀して築港や鐵道網に對する一家の見も吐き、實際の計劃にも卒先し、識見力量も凡流を抜くものであつたが、恐慌に倒されて其理想を實現し得なんだのは人の惜むところだ。

△一時は政治にも趣味を持ち往年は隠然として市の政友派に重きを爲したものが、安川男が奥村七郎氏に致された大番狂はせの選挙以來政治から手を引いた形になつた。多分に詩人肌があり平尾の山莊で静寂を愛し、詩書に親しむ様な彼の性格さし

て、騒々しい彌次馬に伍する事は蓋し不似合だらう。

△「日本の良妻だ」と串談に自慢して居た夫人を亡び、更に長じた子供幾人かを亡び、家庭的に不幸が續いた事も彼の精神生活に變化を與へた事だらう。が彼はまだ意を公生涯に斷つて、市隱を氣取るには早過ぎる人物のレベルがだんだん低下する感ある博多であるだけ、彼の如き輪廊の人物を再起せしめたいとは、特に中老組の人々の洩らす希望である。



亡夫の遺業を継ぎ吉田金物店の隆運を拓いた

女丈夫 吉田縫子刀自

#### ◇先代仁三郎氏よきやで働らく

「賣り家ミ唐様で書く三代目」親爺が爪に火を點して貯めた財産を、ドラ息子が綺羅につぶし、亭主の死後、赤い信女が淫奔で跡を絶やす例多き世に、こゝに物する博多東町の金物屋、吉田商店の縫子未亡人は三十五の時大黒柱たる良人と死別し、二女三男を守りたて、店員六名を指揮して店運を脊負つて立ち、亡夫の遺業を益々發展せしめ、遺子を立派に成人させたのみか、店員の數を六人から二十五人にふやすに至つたのは、婦徳高き女丈夫と云はねばならぬ。

先代吉田仁三郎氏は明治元年、下吳服町の左官職吉田次三郎氏の二男に生れ、幼名を益次郎といつた。世間の慣習にならひ、十二の時官内町のよきや陶器店に見習奉公に住込み、辛苦の中に少年

女丈夫 吉田縫子刀自

期から青年期を迎へた。

二十二歳の時、「博多のやうな狭い天地だけでは商賣も駄目でござつしよう」と云つて大阪進出を主人に向つて提唱したものだ。この邊から氏の非凡の眼光が冴へたし、主人も又氏の器を見込んで之を容れ、大阪土佐堀三丁目の大庄倉庫の隣りに支店を設け、氏に仕事を囑した。地の利によつたよきやは、取引が俄然西日本全體にのび、朝鮮釜山や、北海道にまで延長されて一躍巨商の列に加はるに至つた。陶器の外、北海道物産の直取引をはじめ、博多に持つてきた時には博多商人を驚かしたやうである。

二十三歳の時、主人に勧められて辻堂町の蠟間屋吉田善平氏の二女縫子を妻に迎へ、よきやの裏座敷に新家庭を營んだ。明治二十五年の頃はよきや陶器店の全盛時代で、その商勢は朝鮮から南洋方面にまで及んだものである。今の官内町野村氏紙商の春水園がその名残りで、大正九年財界大變動で一大整理を行つた時まで、店は一盛一衰を續けた。

#### ◇獨立して金物屋を開業

氏は二十七歳の時、獨立して妙見町玄徳稻荷の隣に古着屋を開店したが、折からの不景氣のために苦辛慘膽、ブリキ細工などを兼營して奮闘中、研究心の強い氏はトタン板の有望な建築用金物及材料商賣の有望なる時勢にむかつてゐるのを看破し、舊主人の久兵衛氏の賛同を得て、二十九歳の時下東町に一間半間口の家を買與へられ、資金も貰つて金物屋を開業した。そこは今の店舗の母屋になつてゐる。

仁三郎氏は番頭もする。仲仕同様配達もする。縫さんは店番にさせられ、長女イトを脊に、長男善平氏を懐ろにいでいて内助の功を樹てたこと勿論である。正しき努力は必ず報ひられる、薄資を以て乗出したこの商賣は漸次に發展、殊に野村家にあつた頃大阪支店を切つてまはした關係上その取引先の信用が立派な資本となり、それからそれと堅實な取引先がふへて、最早店の基礎は幾年ならずして定まつたのである。博多の吉田金物店といへば、西日本の斯業界に知れ渡つてゐる。

氏はこの波亂ある生涯をば、明治四十二年、四十二歳を一期として終つた。當時縫子さんは三十五歳、氣の弱い女なら途方にくれて誰かの後たてに便らねば立つて行けぬ所だか、幸ひに主人と辛苦を共にしてきただけに、奪はれぬ氣概と、商賣の體驗が残つて居り、飽く迄家業を守つて後家を

押し通さうと決意した。幸ひ野村家時代の主人の舊友福次郎氏が加勢をしてくれ、亡夫の遺業を繼いで大世帯を切廻し、時には單身上阪して仕入をする事もあり、内に在つて子供の世話から番頭の指揮一切に任じ、女丈夫の玉はかくして磨かれて行つた。

◇縫子未亡人の奮闘

明治四十三年は電車開通のため隣側の百坪餘りを買取（當時坪二百五十圓）店舗を擴張し、大正三年には長女に福次郎氏を養子として迎へ、こゝに始めて相談相手を得て、一ト安堵と云ふ境涯に達した。養子福次郎氏も亦商才豊かな人で、金庫部其他を増設し、店運は益々開けるばかりであつたが、不幸にも大正七年、糸女死亡のため、福次郎氏は成長した長男善平氏に後を頼んで、吉田家をはなれた。

未亡人は、昭和二年店の全支配を長男善平氏にゆすり、後見役として餘生を送ることゝなつたが、善平氏は若盛りの二十八歳、同年花嫁を迎へて夫婦睦まじく、二男仁平氏は二十六歳、三男久兵衛氏二十三歳、茲に兄弟三人協力して遺業を固め、萬代の基礎を築くに至つた。二女が元の養子福次

郎氏方に養女となつたことも床しい話である。前記の如く、現在の店員は二十五名、一年の賣上五十萬圓以上に達する商勢で、他の追従を許さざるは、「薄利多賣」の實行にあり、大工や請負師などが自分で此店に買ひゆき、店頭客の絶へまなき繁昌ぶり、女丈夫たる縫子夫人の奮闘は茲に完全に酬ひられたと云ふべきである。

亡夫仁三郎氏の舊主野村久兵衛氏方は大正九年の整理後、平太郎氏が紙商を営んで居るが、報恩の意味で吉田家が佛事供養を毎年盡されて居ると云ふのは人情輕薄な世の美談の一つである。地下の仁三郎氏も定めて安らかに眠れるであらう。



英語教師から

三井の總理になつた

### 男爵 團 琢 磨 氏

#### ◇ 團家に養子になる

三井合名會社は三井諸事業經營の中樞機關をなし、宗家十一の合資三億圓、日本産業の死活をその手中に完全に掌握してゐる。この三井王國の内閣總理大臣役なる合名の理事長は、今は時めく新男爵團琢磨氏である。三井の團か團の三井か世人に謳はれてゐる。この團氏は福岡市が生める大偉彩であるのは限りない吾人の喜びであり誇りである。身を一黒田藩士の三男に起し、今日の榮達に至る。その蔭にひそめる努力の跡、或る人は追風に帆上げてトン／＼拍子に出世した人だと評するけれども、他人のはるかに及ばざる英才を藏し、追従し能はざる奮勵がなくては帆に追風も來らないのである。

團氏の履歴は奇遇談に或は富んでゐないかも知れぬ。氷の様な理性と、數理的に練られた技術家肌の一步一步と機械の如く確實にしかも絶ゆる間なき運命の進展は、我々に取つて彗星的天才の人格感化よりも大切なものである。

男爵は安政五年八月一日福岡市荒戸四番町神谷宅之丞三男として生れた。長男は諏訪楯本氏（後年福岡日日新聞社長）も六月一日生れ次兄鶴原洗太郎氏も四月一日生れ兄弟三人共に月初めに生れてゐる事は面白い。

神谷家は黒田長政の子忠之にしたがつて島原の亂に勳功あり新地召抱えあり當時諏訪姓を名乗つたがいつしか神谷姓を稱する様になつた。然し明治二年奥州戦争に加はつた神谷氏は、その祖先は島原の亂に大勳功あつたにかゝはらず、目覺しき活動が出来なかつたのは、諏訪姓を名乗らないためだとして、その長男に再び諏訪姓を稱せしめる事にした。

幼少の折氏はその二兄らと共に、伊崎の永田慎七郎に四書五經の素讀をならひ、谷の間部兵右衛門云ふ黒田家の祐筆に習字を師事した。十四歳にして當時荒戸二番丁の黒田家の權大參事（現在の書記官）の八百石の團尙精氏の養子になる迄、多くこのんで友を求むる事をせず、孤獨を愛し、

月光をあびて燈火の下一心讀書三昧にふけた。氏が今日もなほ餘暇あれば必ず讀書するの雅癖は既にこの頃から養はれてゐたのである。

#### ◇十四歳にして米國に遊學す

明治四年黒田長知侯が米國に遊學するに際して、當時黒田藩の俊足として金子堅太郎、栗野慎一郎、團琢磨の年少の三名が藩の留學生として隨行した。一方はボストン大學に入學した。金子栗野の二氏は直に法學を修めた。當時十四歳の氏は下宿の母娘に就て先づ充分語學を修得し、士を抜ぶ學問がすきだと云つて、當時殆ど日本人の注意を拂つて居なかつた探鑛冶金の蘊奥を極めた。留學十年二十四の折歸朝した。しかしその時は氏は全く米國化されて、新智識を修めながら、それを十分利用しうべき機會と場所を求め得なかつた。

「月給百圓以下なら嫌だ」と大分頑張つたが何分仕事がない。福岡に一時無爲玄海の濤聲を聞いたが、やがて大阪語學專門學校の英語教授として月給五十圓を頂戴した。

學校の先生は三年間續いた。やがて東京の天文臺に勤めることになつたがこれも専門外と云ふので間もなく止した。

これに續いて團男爵今日ある三池炭鑛との因縁が生じてくる、三池炭山は元三池藩の所有であつた。その炭層のふかいのとその火力用としての炭質により、又坑内設備の不完全による出水多量のため成金があまりよくなかつた。尙藩の財政も豊かでなくその窮迫をすくふために、政府は三萬五千圓の少額を以て買収したので工務省の管轄になつた。其後十五六年間に、政府は三百六十餘萬圓の巨費を投じて、諸設備をし年額三百八十萬圓の産額ある様にした。この時代團氏は技師としてつまらない貧乏村の大牟田に出掛けて、多年米國で仕込んだ智識を活用してぐいぐいと成績をあげた。然し三池炭坑の浸水に對して從來の機械ではどうしても完全に排除が出来ず、豫想より以上の能率をあげることが出来ない。

#### ◇三池炭坑と共に三井に買はる

氏は再び米國に新機械の買入れに渡つた。その留守中明治二十二年政府は、炭坑を民間に競賣によつて拂下、三井は四百五十五萬五千圓を以て遂にその所有權を獲得した。勿論技師たる氏も鑛山

と共に三井の使用人となつた。始め氏も種々不平があつたらしい。然し技術者の長所は感情よりむしろ仕事を重んずる。これが氏と三井の關係の始まりである。

三井王國今日ある大半は、その鑛山事業の成功にありと稱せられる。その鑛山中の最も優秀なるものは三池炭山であれば三池炭山の成績を披群ならしめた手腕家が三井に於いて如何に遇せらるべきかは論ずる迄もない。爾來團氏が實に追風に帆をあげた如く立身したのは當然の結果であろう。しかし又團氏が金子堅太郎子爵の令妹をその夫人にめとられてゐることも見逃すことは出来まい。金子子爵は政治的方面に勢力を増大してゆき、又大牟田時代九州紡績の社長として親交あつた野田大塊も中央の政界に幅をきかしてゐる。この野田と三井の關係は必然と又團氏三井關係に大きな反響を與へない筈がない。

#### ◇益田氏のあとに遂に合名の理事長に

當時三井を脊負ふ大立物に、中上川及び、益田孝氏の二人があつた。中上川は三井銀行に君臨して、快刀亂麻の手腕を發揮して、ぐいぐいと三井銀行の立直しを斷行し、芝浦、八王子製紙、鐘紡の

乗取りに成功し、その天稟の才氣を負つて專斷とさへ思はるゝ所行すらあつた。はては鑛業部の仕事迄に口を入れ當時鑛業部長であつた益田の感情をひどく害した。三井事業の統一は中上川も益田も早く計畫してゐたことで、兩頭並立は早晚崩壊すべきものである。中上川の辣腕に對する政府筋の反感は、井上馨をして益田を擁護するの態度に出でしめた。この益田の下に團氏滿鐵總裁の山本條太郎氏等があつたのである。

中上川が病魔におそはれ三井より引退するや、三井の天下が既に益田の五指の中に把握せられたのである。益田は又深く團氏を信する處あり二氏肝膽相照した。

しかし物産を主宰して三井純利益の七割を稼ぐと稱せられた益田の勢力に、三井銀行が漸次金融界の覇者として君臨する將來はこないのであらうか。中上川が福澤門下の逸足を以てかため三井銀行に突然として早川千吉郎が現はれてきた。三田系の錚々たる分子も早川の美事なる社交術に魅せられて、おとなしき使用人に歸ると、早川の邸宅は堂々たるものとなり美術品蒐集方面にのみ費す金年二十萬と噂さるるに至つた。大藏省の一官吏であつた彼れが今や堂々たる豪快な生活振りを示すに至ると共に三井部内に於ける早川に對する疑惑が深まつて行き、遂に三井の改革が聲高く叫ば

るゝに至つた。

遂に明治四十二年早川は三井より退くことになつた完全に三井の實權を掌握した益田孝氏も引退し、自ら合名會社の顧問となり、團琢磨氏を推して理事長といふ三井總支配の要職に就かしめたのである。以來團氏の天下と稱せられて今日に至つた。

### ◆團氏男爵を授けらる

直徑六尺周圍十八尺の巨大なる花崗岩の大石柱が駿河町側に十六本室町の日本橋電車通りに四本聳立してゐる。ルネサンス式鐵骨鐵筋コンクリート總花崗岩石建の建坪千五百坪五階建工費一千万圓世界有數の三井合名のビルディング、この世界に呼號する三井王國の差配所に、主として正に七十二の齡を迎へた秋、昭和帝の即位の大興行はせらるるに當つて其の實業界に貢獻する所國家になせる勳功により、遂にえらばれて華族に列せらるるの光榮に浴した。嘗つて黒田侯に隨つて米國に留學した金子、栗野の二氏共に子爵である今日團氏又授爵の恩典あり、三人相顧みて感慨きはみなき者がある。

團氏の名は有名であつた。しかし背景の三井が雄大であり過ぎるため個人として團氏はその影にかくれて左ほど著はれてゐなかつたかも知れぬ。しかし男爵を賜はつたのを機會として現職から引退するのではないかと傳へられて居る。氏は日本實業家を代表して澁澤子の役割をなすであらうとも推測せられて居る。がまだ三井から引くわけには行かない。

資本集中は今時社會現象の一つである。大三井が益々大を加えてゆくのは火を見るより明かであらう。自らは財界の霸權を樹立し、その影に政治の實權に手を延ばし組織は益々鞏固となり、三井王國は益々完備してゆくであらう。しかしその團氏は變轉して止まざる世相に對して青年に如何に語りかけたか。

泰西の風潮が善惡長短を問はず滔々として我國に流入し、殊に歐洲大戰後の混亂せる思想が容赦なく流入しつゝあることは、我國民の最も警戒せなければならぬことである。自ら善惡長短を識別することが出來ず、盲目的に泰西の風潮に左右するやうでは、自己を没却し、國民と國を没却すること、今日は實に我國將來の興廢を双肩に荷なふ青年諸君の決心を鞏固にせなくてはならぬ重大なる時期であると思ふ。青年の前途には、幾多の艱難困苦が横たはつて居る。此の艱苦と

戦ふには鞏固なる精神が必要である。艱難汝を玉にするといふことがあるが、宗教なり道徳なりの上に立つ自治的精神があり、その玉が光りを發するのであると思ふ。私は特に宗教を研究したことはないが、曾つて事業成功の岐るる瀬戸際に、立ち、人事を盡して天命を待つより外無い時に當つて、人間以外に大なる力のあることを直覺し、不動明王が火焰の中に立ち、堅固不動右に悪魔を斬るの利劍を握り、左に煩惱を縛する素を持する姿に想ひ至りて、水火にも災難にもビクともしない堅固不動の精神の力の大なることを自覺し、自ら不動明王と解釋して、自ら信する所があるに至つたのである。

國民的精神が廢頽しては、日本民族の前途は寒心に堪えないことである、滔々たる惡風潮に左右せられず、自己の使命を自覺し堅固不動の自治的精神を以てことに當れば天は自ら助くる者を助くること固より疑のないことである。

#### ◇氏の私的方面

府下原宿の數萬坪の鬱蒼たる森林にかこまれた邸宅に於て、東西の美術品の鑑賞に、三井家の雄

大な事業經營の一日の疲れを慰さめてゐる。會社の要務と訪客のために、寸暇もなく、五分間の面會を得れば一般の訪問客としては異例と稱せらるゝ程である。現在の役目の二三を拾へば、三井合名會社の理事長、三井信託の取締役會長、三井生命の社長北海道炭礦汽船取締役會長で日本一の月給取と稱せられ、毎年三十萬圓以上の配當金があると云ふ。團氏の第二世伊能氏は美術專攻の文學士で金儲けとは全然縁のない大學の研究室に立籠つてゐる。その美智子夫人は宮内省大膳頭上野季三郎氏の五女であり服部金太郎氏の嗣子玄三氏とは義兄弟にあたり長女の壽子氏は三井鑛山常務工學博士明治二十八年帝大工科出牧田環氏の夫人三女スミ子氏は小倉石油の養嗣子小倉房藏氏夫人四女壽枝氏は原富太郎氏長男原善一郎氏夫人である。

長兄の諏訪楯本氏は明治二十年頃の福岡日日新聞社長にして、五十九の時死し、その子息隆氏は本年三十歳農學校をでて三井系の臺灣製糖の技手である。次兄鶴原洗太郎氏は福岡市牧入役の椅子にゐたことがあつたが、現在は氏の最大の嗜好の釣魚や東山流の插花もよし、ひたすらに、老の身の病を養生されてゐる。





士官候補生を断念し理化学を修めて  
成功した

王子製紙  
専務取締役 高田直屹氏

◇小學時代は神童

生活はそれ自身が一つの戦ひであり事業は戦場である。兵士が銃火の中に勇敢に祖國に殉ずる様に事業家は寸時も油断なき緊張と、眞純なる事業のために殉ずる犠牲的精神を、有しなくてはならぬ。

今日本製紙界に君臨する王子製紙株式會社専務取締役高田直屹氏はこの事業即ち戦ひ主義の人である。實業界には三井の大御所團琢磨男があり、又高田氏がその技術を以て製紙界に雄飛してゐるのは氏を出した福岡市民に取つてはやはり一つの誇である。

高田直屹氏は明治三年十一月十六日と云ふ木枯漸く吹きつものらんとする頃、福岡市藥院栗林に生

れた。嚴父は高田俊穂氏はその次男である。嚴父は城代組頭百石取りである。和漢の書を讀破してゐた高田家は累代學問を好むの家柄である。祖父與七郎氏は朗文を號して和歌をよくし龜井南冥と並稱せられた。原田北冥も一門である。北冥は江戸御茶の水で漢學を講じた。

母堂は雅子と云つてやはり漢書と和歌の道に明るかつた。

栗林の宅は五百坪あつてこの廣い家のトントンであつた。

六歳にして警固小學校に出てゐる。縣令より學力優等に對して賞狀賞品を受けた事は幾度かわからない。ある時の如き他の學友は賞狀を受ける然るに高田氏には何等の沙汰もない。

學力の優等で賞狀賞品を受ける事が常例となつて居る當時の高田少年は不審に思つて何故自分には賞狀が渡らないかご擔任の教師に尋ねた。すると先生はもうしばらく待て返事をした。

すると間もなく成績拔群と云ふので當時の縣令渡邊清氏より直接手づから金モール付きの美しい帽子を賞品として冠せられた。

◇士官學校入學を断念す

王子製紙専務取締役 高田直屹氏

小學は神童を以て終つた。十二歳にして大名町濠端にあつた福岡中學校に入學した。高田氏は今は大きい一體に小柄の方であつた。腕白者は小兵の高田氏を時に馬鹿にする事があつたが大男總身に智慧が廻り兼の文字の如く學問上の事では常に高田氏に牛耳られてゐた。

當時中學校では歴史でも數學でも英書でやつつけてゐた時代である。しかも獨逸式にがんがんの詰込み主義であるから實力は優に現在の高等學校に匹敵してゐただらう。然も半期半期に進級してゐた又天才教育が重んぜられた時代であつた。

嚴父の友人は軍人が多かつた。又サーベル姿が青年羨望の的であらうとしてゐた頃である。高田氏もやはり軍人にならうとした。當時の士官學校の試験官は大迫尙道大佐(後の大將)であつた。學力は拔群ではあつたが悲しいかな體格は丙と檢定せられて學術の試験を受けられない事になつた。大迫試験官は眉宇に熱心な希望を示してゐる青年に向つて、二三年體をお作りなさい普通よりは二年計り年齢も若いからと溫情に満ちた慰めの言葉を與へた。

然し軍人たるべき希望が念頭を去らない高田氏は試験官の二三年と云つた言葉を信じて氏は小學校に先づ教鞭を取つて體格の向上を計つた。しかしその間に東京藏前の高等工業學校に學んでゐる

友人から將來機械學の有望なることを懇々と聞かされた。

二年間の給料を節約して約七十五圓を貯蓄してゐた。明治二十三年大日本博覽會の開催中に遂に希望を一轉して工業家ミなるべく上京したのである。

### ◇紙の研究に専念

當時我國の工業はその黎明期であつた藏前の高等工業の機械科を選んだ高田氏は入學試験の難關を突破して入學したが小學校教員時代に修養した數學外國語が餘程役に立つた。當時下宿料は三圓八十錢で二年後には郷里福岡より月五六圓の送金を受けてゐた。

當時在學中機械學の全般に涉りて學修する事は勿論であるが卒業後實社會へ出てから機械學を應用するにしても如何なる工業に従事すべきかの問題に付て常に考慮して居つた、是に同氏が軍人希望を放抛した當然の歸結であつたらう。而して當時成功せる各種工業の一般に涉りて暇さへあれば書物を読み篤と實地の見學をした。其結果製紙工業は他の工業に比して機械的、化學的に學術の應用範圍が極めて深く従て複雑困難なる工業ではあるが、大昔より人文開達に密接な關係ある物

を普通の工業製品よりは一種崇高なる性質を具備する物であると云ふ考から高田氏は遂に紙の研究に専念するに至つた。あらゆる紙に關する文献をあさつて少くとも我國に於ける智識は盡くわがものよし休暇には大小となく國內各地に散在する製紙會社を視察した。然し王子製紙のみは縦覽謝絶の高札を掲げて工場外のものの入場を禁じて門戸を開放しなかつた。

製紙及製紙機械に就ての一卒業論文を作成して學校生活は永遠に別れを告げんとした。

この論文は學校教授の注目を惹く處となり王子製紙の最初の支配人谷敬三氏もその該博なる索引傍證と實地に即した論文に驚き使ひを高田氏の下宿に馳らせて面會を求め王子製紙會社に入社を勧められた。谷氏は高田氏を工場に導いた。而して高田氏は工場の實際作業機械運轉の状態を直參觀した後ち再三の谷氏の勧誘の言葉に對し入社條件として當分の間職工と同様に實地の労働作業に従事出来る様にして貰ひ度いと云ふ申出をした。當時の高等專門學校を卒業し特に懇望せられて聘せられたる高田氏は自らの熱望通り一職工として毎日王子工場の門をくぐる事となつた。勿論當時の世間並みしても正社員技師月給三十圓位には谷敬三氏も招聘する積であつたのに高田氏の此の言を聞きて一時は不審に思つたが高田氏の眞意を納得して大に驚き且つ喜んだ。

#### ◇王子製紙に入る

斯くして高田氏の希望通り日給五十錢の一職工として晝夜交替十二時間勤務する事となつた。汗ミ油に滲んで毎日のひたばしりに働いた。手の甲と機械で受けた傷は今尙高田氏當時の奮闘振りを雄辯に物語つてゐる。これが高田氏今日ある始めである。

印刷業は戦争を一階梯として進歩する。日清の役後我國に於ける新聞紙の發行部數は昔日に倍加してゐた。

王子製紙ではさきに静岡縣氣田に分工場を設けてゐたが、明治三十二年静岡縣磐田郡佐久村中部に信遠地方の山林より木材原料とする木紙製造の工場を作り、原動力及物資の輸送に天龍川の水力を利用して新聞用紙の製造に従事した。

然し國內の山林には原料材の數量が少く、材質も亦不適當であるから、單身北海道の實地視察調査に出掛けた。此の年少の高田技師は深く心に悟る處があつた。明治三十一年八月斯界の先進國米國に遊んだ。

當時日本の新聞紙の需用は益々激増し海内の製紙産額は到底その需用を充たすにたらず、重に米國より輸入してゐた。しかるに我國より米國に出して居たものは生絲と茶くらいに過ぎなかつた。國をおこすは産業をおこす事だ。わがたすさはる製紙方面ではどうしても國內で新聞用紙は自給自足が出来る様にし同時に本邦特産の日本紙の輸出をしなくてはならぬと決心し、米國內あまねく視察し、かの薄紙製造を以て有名なるクリスタルコンパニーに入社して先づ以て日本手漉製の薄葉紙を機械製にして多量に廉價に機械業的生産品として米國に輸出する下準備の研究に着手した。勿論無給であるしかも熱心であるから、工場主からも職工仲間からも非常に可愛がられた。其のうへ頭腦はよいときて居るからなほ更の事である。米國を去つて歸途英京を訪つれ又英國の製紙業を視察し明治三十四年の年末に歸朝したのが第一回の洋行であつた。

米國滞在は約三ヶ年である。この滞在中に我日本の新聞用紙製造地は北海道だ、と云ふ事が腦裡深くきざまれた。

又新聞紙は國民の少くとも精神の糧だ。この新聞紙が外國から輸入されて居るのは我國民の恥である。否製紙業者の同胞に對する無責任だと感じた。

すべて事業もそうであるが、特に製紙の興廢は水力利用の如何にある、高田氏は在米中又水力に關する研究もおこたらなかつた。

又他の人は洋行すれば肩書を欲したが、しかし高田氏は常に名をさけて實を取つた。必ずドイツでも英國でも作業服の職工の間に加はつて仕事をしきた。

愈々腕にも自信がある日本製紙界の將來に關しても抱負がある。光明に輝いてなつかしの故國の土を踏んだ。

### ◆北海道に着目

王子製紙會社は明治初年創業當初より三井組の資本が大部分投資してあつたが事業開始以來約卅年間は洋紙需要の未開時代であり同時に以後は外國輸入紙の壓迫時代であり高田氏が王子製紙會社に入社以來は事業經營困難の最も甚だしき時代であつた。

高田氏の胸には製紙と北海道とがさうしてもはなれ得ぬ。駿遠信の日本中央山脈の原材料の貧弱高價なる者を使用して居つては外國との競争にはならぬ。特に原動力も石炭火力、原料は稻藁が大

部分と云ふ有様では到底生産費に於て壓倒せらるゝに極つて居る。故に日本の製紙業獨り王子のみならず何れの會社も社運日に傾いて行つた。(高田氏は明治三十一年の洋行以外五年毎に外遊する事になつた)。高田氏は明治卅六年に機會を得て豫てあこがれの北海道に心をおこらせながら遊んだ日程二ヶ月有半である。

當時の王子の専務は三井銀行の神戸支店長をして居た鈴木梅四郎氏が入社後間もなき頃で、高田氏は當時工務課長であつた。而して高田氏の北海道滞在が稍長期に失したと云ふので氣嫌が斜でなかつた。

しかし高田氏が二ヶ月有半に亘る北海道の調査を報告するに及んで、その用意周到しかも細密なる内容にさすがの鈴木氏も驚き王子製紙の將來の隆盛は實に北海道進出にありとその意中の一端を述ぶるや又鈴木氏は非常に共鳴し先の不平は何處かへ霧の如く去つた。

明治三十七八年の戦ひが起るなどは勿論夢想だもせず製紙工場建設調査に着手して居つたが新聞用紙の需用は愈々激増してきた。國內の生産能力ではどうしても需用に應ずる事が出来ない、さりとて從來永年我製紙業に壓迫を加へ來つた外紙の輸入に仰ぐべきでもないから王子製紙にてはどうし

ても更に生産力を増加して供給を圓滑にせねばならなくなつた。

それには原料材の蓄積に富み且つ水力の便利を有する處の地をトせねばならぬ。

### ◇北海道の研究

高田直屹氏の主張する北海道こそ正に理想の地相である。

高田氏は再び北海道に渡つた。前に倍せる精密なる調査を行つた。その報告する處によれば工費八百萬圓を要する。

しかるに三井銀行は今でこそ東京のみにても三億二千萬の預金を擁して居るが當時資本金五百萬圓にすぎず、王子製紙も資本金二百萬圓である。北海道の一工場に八百萬圓を投ずる事は當時の大實業家連の頭をひねらした大問題であつた。しかし調査は前後三年間に亘るもの成算は既にあつた。高田氏の主張には反駁すべき一點の隙もなかつた。

明治三十九年の夏、三井の相談役格として羽振を利かしてゐた井上馨侯の邸で會議が開かれた。出席者は井上侯、三井を當時脊負つて立つてゐた益田孝、朝吹英次、鈴木梅四郎、高田直屹の五氏

である。

朝より議に議を練つた。麥めしに南京豆の煮付けを食べながら尙論議はつきなかつた。

井上侯は八百萬圓を一時的に増資することを極度に危んで大資本を長期に出すことを主張した。

然し高田氏は一度に増資しなくては完全な設備が出来ないこと、北海道に製紙工場を作るはただに王子製紙獨りが利するのみではなく北海道林業經營の爲にも日本製紙業全般の爲にも北海道の産業發達のためにも是非工場を設立すべきであること、これが端緒となつて諸産業が發達することを諄々と説いた。

遂に井上侯も賛否に迷つた益田氏も遂に高田氏の意見に賛成することになつた。

#### ◇苦小牧の工場設立獻策

紙を木材竹材の纖維よりとることは由來東洋の發見にかかはる、而して現代の機械製紙としても其の原理は東洋流の製紙術が其の基礎根底をなして居る。

然し工業的に大量に且つ廉價に製産するには東洋は尙歐洲斯業に相對のすべくもなかつた。

直ちに王子製紙は北海道に高田氏が卜せる苦小牧に東洋無比の大製紙工場を建設し始めたのである。外國よりの紙の輸入を全然防遏すべく光明に皆燃えて居た。

三井が投資して王子製紙が北海道に大製紙工場を設置するの報が一度米國に達すると米國製紙界に一大センセーションを起した。

大平洋對岸オレゴン州の一大製紙工場は豫定の擴張事業を之が爲に見合せた。

苦小牧工場は高田氏の主張によつて生れたる工場今その大略を述べよう。

苦小牧は北海道膽振國勇拂郡の苦小牧にある工事着手は明治四十一年で四十三年八月竣工し九月より操業して居る。

工場の動力は千歳發電所より得る。その水源の支笏湖は膽振國千歳郡にある東西三里南北約二里面積四九平方里の不凍湖にして洪水又は湯水の憂なき天恵の良水源地である。四面高山に圍繞せられ湖水を隔てて樽前火山があり眞に風光明媚神祕の仙境である。

この水源より流出する千歳川の有効落差四百二十尺を利用して第一發電所があり第二第三第四の發電所が尙その下流にある。

さてその原料木材は何處にあるか重に日高方面であるが十勝の國然別の國有林等よりも供給せらる。その總面積五十餘萬町歩と稱せられて居る何れも千古未だ斧鉞を加へない鬱蒼たる蝦夷松及びとど松の處女林である。

冬期を利用して伐木したものは玉曳及び馬樵にて山出しされ鶴川を利用して流送され、網羽に殺到する鶴刈の原料積込場即ち日高の國佐瑠太及び支笏湖より苦小牧迄五十哩の輕便鐵道を苦小牧輕便鐵道會社の名に於いて經營して原料運搬に充てて居る。

又苦小牧工場にては撰材を伐採すると共に一方に於いて跡地の更新に重きを置き殖林事業をなし苗樹の栽培をなして居る。

昔日の一寒漁村であつた苦小牧は今や年額二萬圓のバナナを消費する町である。

工場は東洋第一の新聞用紙製造工場である。年額一億八千五百萬封度と稱して居る。

總ての完全なる設備のある雄大なる工場の産みの母がわが福岡が生める高田直屹氏であるとは何と喜ばしいではないか。

高田氏は事業に感謝しつつ人生を戰鬪的氣勢を以て貫きつつ今日その王子製紙の中樞に座するこ

とを得て居る。

ロングフェローはエクセルシアの詩の中に前へ前へと書いた小旗をかざしつつ高山に進む青年を歌つた。今高田氏の奮闘はこの詩人の作と共に深い感銘を吾人に與へずには置かならう。



博多情調ゆたかな仁○加煎餅を  
發案して成功した

東雲堂主 高木喜七氏

◇博多土産は何々か

にはかの半面を何の變化もせず、そのまゝ意匠にとつた「にはかせん餅」は、よくも考へついた代表的の博多土産ではある。博多織、博多人形が歴とした由來つきの代表的博多土産なることは、決していなみはされないが、僅かに二十年足らずの若い歴史しか持たないものとして二〇加煎餅は、上の上なるものと云ふべきだ。

其地の土産物の資格を有するには、其の土地のローカルカラーを表現し、然も安く買はれ、携帯に便なり等々々、立人が議論を戦はして銘打たずとも、「にはかせん餅」は素人でも感心する思ひ付の博多名産である。工夫なきところに工夫のあるのを、如實に物語るとは、この「にはかせん餅」のことで

あらう。

◇岡蒸氣と喜七氏

此の「にはかせん餅」を發案した高木喜七おぢいさんは大變篤實な性質である。二十歳頃親孝行の篤行者として、黒田家から表彰状と金一封を頂戴した。それはやかましい繼母さんに仕へて非の打どころのない篤行があつたからであつた。

明治二十年頃は、博多から久留米まで鐵道が通じた年で、喜七翁は四十八の働き盛りであつた。開設最初の博多驛は、入口に三段の石段があつた。乗降客が少いので、驛員は暇ばかりであるのと珍らしい新らしい驛のことゝて、その石段はのべつに掃除されて、塵一つも止めないきれいさであつた。客は皆旅仕度だからわらじばきであつたが、驛入口の石段が磨き上てあるので、もつたいながることおびたゞしく、わらじをぬいで切符賣場に通つたものである。

その頃までは岡蒸氣といつてゐた。「岡蒸氣の切符はどこで買ふとな」と、誰もかれもキヨロくしたものであつた。それ程開けないのだから、當時驛前に三角店のお茶店が作られてあつたが誰も

東雲堂主 高木喜七氏



營業するものがなかつた。先見の明ある喜七翁は、當時有名であつた行き當り餅と、川端萬屋のお菓子と自家製の東雲堂饅頭を、その三角店で賣ることゝしたが、店は振はなかつた。故に行當り餅と萬屋に掛けあふとどうぞお勝手にといふことだつたので、喜七翁は一人で引受てお茶店經營に従事した。

當時の驛長は「今は思はしくはあるまいが、行く／＼はとても繁昌する」と喜七翁をはげまして居たさうである。明治二十二年にはホーム賣りが開始されたので、喜七翁はお菓子類其の他は下澤氏（物故した善右衛門氏）がホーム賣をした。東雲堂と下澤とは、實に九州に於ける驛賣店の元祖である。これも喜七翁が京都見物で見學したので思ひ切りやれたものである。

かうして喜七翁は驛を受持つて、二十年間一日もやすまず勤勉したものであつたが、翌年の共進會に成功するには宣傳すればよいといふので、明治四十三年の秋その材料に博多らしい土産を研究したのが、二〇加煎餅であつた。

### ◇博多織をやめて煎餅屋へ

「にはか煎餅」は明治四十三年の九州沖繩八縣聯合共進會の前年の秋に、博多下祇園町に博多特産の博多織を販賣してゐたが高木喜七翁の總領の友太郎氏が、博多織職で身を立てんと、織工場へ弟子入りして腕を磨きあげたので、饅頭屋をやめて博多織工場を開いた。その工場が今の東雲堂「にはか煎餅」屋である。

東雲堂はまんじゅうを製造販賣するかたはら、博多を起點とした九州鐵道の開通のそも／＼から驛賣店を開いて居た事は前に述べた。（今でも飲料と菓子類の驛賣は東雲堂がやつて居る）そこで土産物かゝるくて、嵩ばらず、長持して博多情味たつぷり、かうして土産物はないかとその考案熱にかされた理由がわかる。

どこともなく、食物がよいと考へた。然し饅頭は適しない、——考へれば考へる程六ヶ敷ものばかりで、かへつて土産ものらしくない。考へくたびれた空ツボの脳裡に、幼影の如くボンヤリ映つたのは、單色の幕背景の前の博多二〇加のおどけた面白い場面である。その場面に出てくる男、女、番頭、隠居、それ／＼の人物の様々な變つたなかに、一樣なのは例の「半面」ばかりである。工夫するものはない。此の半面を何かで形出したら——さうだこれに限る。そしてそれを煎餅にしたら

よい。至極簡單ではあるが頗る振つてる。かく喜七翁は思至つて膝を打つて小躍りして喜んだ。そこで博多織店の裏に二つのかまをすえて、焼き出したのが「二〇加煎餅」である。そして翌年の共進會に賣り出したところが賣れるく、高木父子はかうまでうれやうとは夢にも思はなかつた。大好評に、勇氣は百倍千倍形容の言葉もない。

年一年と何時とはなしに其の名聲がひろがつて、大正七八年の景氣來に、焼いても焼いてもやきあふせない。そこで父子兄弟が陳容をととのへることにになり、友太郎氏は驛の賣店係となつて、對外的宣傳賣出しに力を注ぎ、次弟の純一氏がお父さんの喜七翁と製造にかゝることになつて、大正十一年現在の處を改築して、裏に機械三臺、手焼六臺を据えた工場を設置した。此の基礎が固まつたのを見て、純一氏はをしくも長逝したので、後喜七翁の孫さん當主の孝太郎氏がお爺さんの指導で製造に従事することになり、最初に工場のあつた博多織販賣店に金物商を開いてゐる。末弟萬次郎氏が支配の格で孝太郎氏を助け今に、相變らず盛業をつとけてゐる。店の販賣方針は、福岡市中心主義で近郊の卸小賣を主とし東京、大阪で時にデパートがやる土産品陳列會に出品するが、對外的宣傳の唯一方法である。又各地の共進會博覽會には必ず出品する。出品すれば必ず入賞する。今

では各地博覽會の金銀銅賞牌が数えきれぬ程になつてゐる。東亞博では十萬圓も儲けたが、毎年變りない處で八萬圓と云ふ揚げ高である。喜七翁は本年八十歳東公園内に靜かに老身を養つてゐる。この東公園は柴田前々知事案により、現代式の公園にお化粧されて居るが、此の公園として七卿落の際福岡滞在中、三條實美公が開園の意見を當時の博多の元老たちに述べられて出きた由緒のあるものである。現在ひようたん池畔藤柵下に三條公の開園計劃が石に刻んで建て、ある。そこで現代式公園は非常に結構であるが、史實由緒ある公園のことだから、昔の公園の姿も保存したがよい。とて、博多古老間に機が飛んだ事がある。當時翁は其の中心人物で、特に年々枯れてゆく千代の松原の老松樹も守れと市民の輿論の喚起につとめた。



豪放だった先代の後をうけて  
デパートを設立した

玉屋社長 田中丸善藏氏

◇一列車の反物を仕入してゐた先代

玉屋の田中丸善藏氏と云へば福博で誰しらぬ者はない。しかしどんな人物ですと、反問するならばあの巨體に面白い過去が秘められて居るか、胸中に如何なる意圖を抱いてゐるやら語り得る人は少いのである。

大きな體と微笑を常に含んだその顔は、我々に無限のしたしみを感ぜしめ、何とはなしに道に行き交ふ度に話かけて見たい衝動にかられる。この風貌と、人格は所詮一代の産物ではあり得ない。現今では玉屋と云へば全九州の者が、中洲の盛り場に王侯の如く君臨してゐる九州一のデパートを指すが、一むかし前はそれは佐賀牛津の呉服の巨商玉屋を聯想してゐたのである。

先代田中丸善藏氏は、牛津のうわばみのニツクネームを戴いて居た。貨車四十輛の反物類を仕入れ得たものは關西恐らく牛津玉屋の外にはなかつた筈である。西陣、足利秩父でも善藏氏が仕入れにきたの報知があると、相場が突拍子に暴騰し所謂玉屋相場を産地に作つてゐた一代の豪商であつた。この豪快な膽玉の大きい玉屋主人を父として當代の善藏氏が八十人の店員を使つた老舗の奥に孤々の聲を擧げたのは明治十四年一月三日であつた。牛津附近は所謂稻實つて家富むの貧困しらすの別天地である。白石十二ヶ村は新開地の故に税金はやすく、農家各戸割の田の段別は廣く而も一段歩玄米十三俵の收穫地である。購買力は極度に強い。婚禮あれば一度に數千圓を投じて嫁女の衣裳を準備する事は稀らしくない。牛津玉屋にゆけば呉服類で、ないものはない。馬牛をひいた大もの買の顧客が、日に十數組となく押しかけて文字そのまゝ店頭市をなすの盛況を呈してゐた。これを支配してゐた先代は又傑物ならざるを得ない。東の玉屋西の玉屋と謳はれ四百町歩を擁する大地主の半面を見せた。伊萬里、唐津、佐世保、五島、平戸、熊本、鹿兒島方面、玉屋の手を經ない呉服類は殆どなかつたと云われてゐる。

## ◇佐世保工廠に共濟會を作らしむ

この素晴らしい昇天の勢ひある巨店舗の中に育まれた當代の性格は推察するに難くない筈だ。

佐世保の海軍工廠長に明治四十年頃向山中將が居た。非常に部下に慈悲深い人で一萬の職工が賃錢の安いために苦しんでゐるのを黙視するに忍びない。それと云つて昇給は豫算の關係で出来ない。唯一の救済の手段は職工購買品の價格の低下を圖るより方法はない。しかしそんな犠牲的精神を有した商人があらうか。向山中將は頻りと快氣ある商人が欲しいと或る人に歎息した。この人が偶然の機會に田中丸氏ミタ餐を共にして話がこの事に及んだ。未だ二十六歳だつた氏は俺がやつて見ると一膝乗出したのである。これが氏の佐世保進出の第一歩で恐らく全國的に田中丸と稱せらるゝに至つた始めであらう。

海運共濟會が創立せられ商品價格は市價より一割五分安ときてゐる。佐世保内に二十の分配所を置き金券を發行して業務の圓滑を期し、職工は生活の餘裕を得て田中丸氏に無限の感謝を惜しまなかつた。しかし反面には市内の小賣商は死活問題となる程の大打撃を被つた。田中丸を殺してしま

への叫び聲が起り友人よりの身邊を用心せよとの忠告が頻りとつたへられてくる。憲兵隊からは毎日今日は無事だつたねと訪ねてくる。しかし氏には御國のためになしてゐる仕事だ小賣商には氣の毒だが許してもらはねばならぬとの固い信念があつたので些小も動じなかつた。小賣商の形勢が氏に對して險惡の程が増加してくると工廠職工團が決然として立つた。

田中丸にゆび一本でもふれて見る、その時こそは佐世保中は焼野原になると知れと叫び出した。氏と小賣商の間には其の後圓滿に了解ができた。

海軍港の常として艦隊の入港すると物價が急に暴騰する艦隊相場と云ふものがある。其の後これは完全に氏の手によつて調節さるゝに至つた。これが機縁となり海軍御用達を勤める様になつた。今日田中丸氏が精米所を經營し、一日三百俵の白米を賣だす米穀商であり年販賣額五千石の酒屋の主人である事はその筋の人でなければあまりしつてゐない。

購買會は後に官營の海軍共濟會となつて、昔日の機能をはたして居る。

## ◇佐世保市に對する功績

玉屋社長 田中丸善藏氏

佐世保は軍港開設前一寒漁村であつた事は周知の事である。開設後も全町完く海軍に寄食し海軍を別にしての産業も營業もなかつた。

氏はこれを以つて佐世保を殷盛ならしむる所以でない事を覺つて、五島平戸に航路をひらき、往船には商品を持つてゆき歸航にはその海産物をもたらし、佐世保魚市場の濫傷をなし自らその社長となり、以後佐世保は又商業地として新面目を有するに至つた。これは實に氏の努力の賜ものであり。市民は幾度か田中丸氏を市會議員に連続に推して氏の功を勞つてゐる。

やがて佐世保に高層のデパートを建設し久留米、門司に玉屋支店が開設され商權全九州に及んだ。

### ◇南洋貿易時代

バルカンに於ける同盟協商國の覇權爭奪に因して、歐洲の天地に戰雲漲つた頃我が海軍の將卒は全太平洋地中海方面に活動した。青島包圍の海軍の御用達は田中丸氏がつとめてゐた。

太平洋上にかのエムデン號が海蛇の如く出沒して商船の航通は全く杜絶した。我が海軍に占領さ

れた獨領南洋の諸島は食糧を得る術がない。土人及び獨逸人は唯飢餓を待たねばならなかつた。占領をなしてその領内住民の生命を保護しないのは人道に、もたらぬかとの獨逸人の抗議が海軍省に舞込んで來た。

かねて氏の快氣を知る秋山軍令部長は田中丸氏を呼んだ。南洋艦隊の司令官松村中將及び當時の海相八代大將は氏に日本海軍面目のために奮起せん事を促した。

五千噸の商船が用意された。食糧品商品を滿載してあらゆる階級にわたる四十數名の便乗者と共に横濱を出帆した。勿論田中丸善藏氏を長とする南洋をめざす船である。

しかもエムデンの發する一魚形水雷に見舞はるれば鴻圖空しく水泡に歸せねばならぬ。双肩には脊負ひ切れぬ責任を有してゐる。海面徒らに黒うして暗夜星のみ輝く時唯聞こゆるものは舷を打つ激浪のみである。全く暗に始まり暗に終る消燈の夜行に舟人は濤聲のまに／＼響くエンジンの音にのみ心臓の高鳴を聞く如く唯一の生氣を感じてゐたに相違ない。

突然と前方に燈火見ゆの報が前橋より傳はると「すはエムデンだ」、覺悟はしながら人々は戰慄せざるを得なかつた。或る時はエムデン見ゆの報告に、一晝夜船は目的地と反對方の向に走つ

た事もあつた。しかしこの不安焦燥の航海は六十日に終へて各島を巡航して無事使命を全ふした。和服型で中洲の玉屋の正門から出て来る氏の風俗に一種のマドロスの趣を感じるのはこゝに因を發してゐるのである。

この結果は資本金六百萬圓の南洋貿易會社の設立となつてゐる。政府より毎年百八十萬圓の補助を受け日本南洋の航路を開いた。

南洋貿易は順調にいつた。しかし増加に増加して行つた船數の關係で戦後の不況に少からぬ打撃を受けたらしい。氏は社長の椅子を、事業を共にした友人に譲り、自らは東都に遊んで時勢の移行を靜かに感じた。南洋貿易開始當時氏は三十四歳に過ぎなかつたのである。

### ◇福岡市とデパート

大正十年に東京の生活が終つた。佐賀牛津に歸るさ福岡に足を止めた氏は福岡市が急速の發展をなし關西に誇るに足る文化程度の高い都市である事をしみじみと感じた。しかるに奇異の思ひに打たれるのはこの市にして

第一に完全なるホテルのない事、

第二に文化都市に必ずあるべきデパートのない事、

第三に濱部が全く等閑に附せられてゐる事、

の三つであつた、特に心の企業心に刺戟を與へたのはデパートの建設であつた。

十數年前玉屋は佐世保にデパートを有してゐた。鹿児島、熊本、長崎、佐世保の會員よりなる九州デパート會なるものがあり、毎年各地々々に順に春季總會を開催してゐた。而し最も九州に於ける文化の進んだ福岡市がこの會に會員を送り得ないのは福岡市の誇りに傷を與へるものだ。どうしても福岡にはデパートが必要だと氏は切實に感じた。

丁度その折に東中洲の十七銀行のビルディングが賣りに出る事を聞いて早速買収を終えた。

このビルディング内にはホテルあり、食堂あり、理髪店あり、會社、事務所あり全部二十五六の借間人があつた。この全部が三ヶ月間に圓滿に立退をなし不平の聲が一も出なかつた事は當時小屋の店子でも立退を要求されて一年も尙その上も要求に應せず頑張つてゐた時代だつたが故に一般は不思議の感に打たれたのである。此處に氏の一面に玉の如き人格がうかゞわれる。

大正十四年四月買収は終つて、七月から内部の改造工事に掛かり、百坪の新館増設をなし、十月には開店の運びになつて居る。その機敏に職人商人又驚異の目を見張つた。電工など、こんなすばらしい進度を見た建築は始めてだと歎聲を久しくした。

### ◇玉屋の出現に

福岡のデパートの濫觴は松葉屋である。外形内容ともにそれは現代的にデパートであると云ひ得たか否かは別として兎角成績は面白くなかつた。一般はデパートに對して其の便利を覺知し得なかつた。中洲の大火によつて松葉屋が烏有に歸しデパートについての市民の關心は消失した突如として玉屋が創立さるゝや時期尙早の論が、翕然として起つて智識階級すら松葉屋の例をかへり見て冷笑をあげせた。しかるに愈々開館となるや貧富を問はず其の便利に驚き非常の賞讃を博するに至つた。

商店街の中心は本通筋より東中洲に變移せんとするの兆は此頃よりあらはれてきた。商店よりは反玉屋の悪宣傳が流行しはじめた。玉屋でもそのために事務の發展上に多大の迷惑を被つたのは事

實らしい。デパートの開始に地方商人の悪宣傳の伴ふはデパート發展に附纏ふ一階梯である事を氏は熟知して居た。

即ち三越が愈々開店するや、あの帝都にも住民の文化程度が高いにかゝわらず悪宣傳は盛に行はれた。三越と關係ある三井銀行ではために預金が激減した例もあつたのである。

しかし漸次デパートについて民衆の理解が進み、昨春よりは不二屋の開設と共に玉屋の美觀が比較認識され顧客激増し賣行倍加して非常の良好な成績をあげはじめて愈々福博名所の一つになつた。



縣廳の下級官吏に見切りをつけて  
上京勉強して立身した

蓬萊生命専務 武末祐三郎氏

### 口祖父、愛孫を世の荒波に投ず

月に一定の給料を載<sup>いた</sup>てて机の前に終日座つて上官の機嫌<sup>きげん</sup>をうかがひ、徒らに月日の過ぎゆくをうらみ、頭髮白きを加ふれば、家庭に愚妻あり、餓鬼數人あり、恩給<sup>おんきき</sup>はあれども一家を養ふに足らず息子は秀才<sup>しゅうさい</sup>なれども大學に學ばずに費なし。うつぶんを秋の日の川端の糸竹<sup>いとたけ</sup>にはらさんとすれば黄金の穂波に百姓の歎聲<sup>たんせい</sup>を聞く。實に下級官吏の將來程みじめなものはない。

然し新銳の氣を負ひ、胸に滿々たる野心<sup>やしん</sup>のやりばなき青年<sup>せいねん</sup>は、この生ける屍の中に生涯の幾分でも費すことは、辛抱<sup>しんぱう</sup>し切れる筈<sup>はず</sup>はない。

茲<sup>こゝ</sup>に紹介<sup>せうかい</sup>せんとする武末祐三郎氏は、この種の典型的の模範<sup>もはん</sup>を生氣<sup>せいき</sup>ある青年に示してくれてゐ

る青年よ熱烈<sup>ねつれつ</sup>なる野心を有せよ。

これこそ現代青年へ贈<sup>く</sup>らるべき金言である。

武末祐三郎氏は明治十四年五月十二日筑紫郡春日村の生れ、嚴父<sup>げんふ</sup>は富次郎と云つて農業を營んでゐた。祐三郎氏はその長男である。鳥はたのしげに囀<sup>さへづ</sup>り、菜の花に胡蝶は飛びかふ。清水は小川をつたひ、水邊に可憐<sup>かれん</sup>の草花がある。田園の春、田園の秋、全幅詩の境中の生活<sup>せいかつ</sup>の中にその少年期を送つた。春日小學校に入學したのが六歳、四ケ年で學校<sup>がくかう</sup>を卒業高等小學の四ケ年の課程を終了してあこがれの中學修猷館<sup>しゅうい館</sup>に入學した。

當時の中學生は霸氣<sup>はき</sup>滿々<sup>まんまん</sup>であつた。又燃ゆる野望があつた。日夜印刷インキの香<sup>かほ</sup>りの高い教科書を開いては、幾何だ代數だ英語だ、ミ勉強<sup>べんきやう</sup>に餘念<sup>よねん</sup>がなかつた。

然し武末氏の祖父は一風<sup>かぜ</sup>變つた人であつた。嚴格秋霜<sup>たうじやう</sup>の態度<sup>たいど</sup>を以て愛孫にも對した。平凡な學生生活を送らすよりも世の荒波の中に投げ出すのも一つの教育法だと信じてゐた。

祖父は遂に祐三郎氏をして修猷館を中途退學<sup>たいがく</sup>せしむるに至つた。



口福岡縣廳農務課出仕となる

學校を退いた氏は福岡縣廳に出る事になった。そして一日二十錢の日給を買った。事務室の机の前にして一日働いたしかも一生懸命である。農務課出仕であつた。自宅より毎日一里餘の田舎道を下駄で通ひながら、ポケットにリーダーをしのばせてゐた。星をいただいて歸宅する事もあつた。つかれた體を休めることもしないで、直に忙しい時は農事の手助けをした。官廳も上官の覺え目出度く十一圓の月給をもらふ迄になつた。

當時は官吏萬能の時代であつた。大學を出て高文をパスした青年事務官は、下級の屬吏に對しておうような態度で挨拶をした。この連中こそやがて課長部長と進んで官吏の華なる知事に昇進するのである。武末氏はじつとこんな事務官の姿に羨望に燃ゆるまなざしをなげた。するこ筆とる我身のはかなさが胸に痛むほど感ぜられる。如何に事務に精勵しても、いつ我々に高等官になれる機會がおとづれくるであらう。あの青年にはやがて成功がくるだらう。氏が一寸前の方を見ると頭髮の白い老人が眼鏡ごしに、何か帳簿に記載してゐる。生活力を失つて、唯だどんよりした目で、文字を一つ一つ拾つてゐるぐずぐずしてゐれば、俺の最後がこの老人だ。これこそ俺の將來の姿の暗示だ。

すると武末氏はたまらなくなつた。中學時代の同窓生をかへり見ると、どんぐりと勉強してゐる彼等も間もなくこんな事務官としてくるであらう。このまゝしてはおられない。武末氏は胸中深く決する處があつた。

明治三十三年九月一日。晩夏か早秋か一脈の秋氣は既に動き始めてゐた。——東京へ遊學に——華やかなる男々しい心を抱いて、風呂敷つつみを背に負ふた武末氏は、雜飼隈驛のプラットホームに姿を現した。懷中には縣廳に通勤して貯めた二百圓の通帳と、現金十圓餘があつた。門司驛より家にむかつて手紙を書いた。

家では縣廳に出勤したものとのみ思ひこんで、その日歸宅しないので役所に問合せて見ると、今日は缺席であるとの返事、不審に思つてゐた時に上京の手紙である。

開封して見ると向上心にたえかねて勉強のために上京するとある。一家は氏の心中をよく理解して、心おきなく勉強する様、東京に落着いた下宿の氏の元に返事をやつた。

## □中央大學に入學

本郷元町の下宿屋で氏は家の承諾の手紙を受けとつたので、直に二百圓の貯金通帳を送りかへした。下宿とは四畳半の友人の部屋である。その友人こそ現會計検査院の清原徳次郎氏である。當時下宿料は六圓中央大學の法學部の法律科及び經濟科に學んだ。二人は夜のふくるも知らず讀書にふけた。或る時の如き幾度かの深夜までの勉強がたゞつておそひくる睡魔のためにランプを引つくりかへしほや騒動を起したこゝなどあつた。

然し二人は共に相はげみあひ、猛烈な讀書を續けていつた。

當時の同級生には前三菱地所部長現東山農事會社の齋藤延氏がある。勿論清原氏もその一人である。大學は明治三十九年に卒業した。

武末氏は在學中保險業について研究し、又名士の講演を傾聴した。危険を社會全體で分擔せんとする最も社會事業的な、而して最大多數の最大幸福を追求する事業に、氏の生命は小躍りしたのである。將來身を投ずるはこの保險業より他にないと決心した。

故に直に安田の共濟生命に入社し、募集課に勤務し月給二十圓をうけて日々營々として仕事に精勵した。明治四十四年迄本店や各地支店を主任級として擔任した。そして一旦郷里に歸つてのびくと筑紫の空氣を吸つて靜養した。

## ◇太田清藏氏と相知り遂に重役に拔さる

氏が太田清藏氏と相知つたのは氏がまだ共濟生命にゐた頃からである。氏は太田氏の元にあつて手腕を振るふ事になつた。明治四十四年十二月より第一徵兵の福岡出張所長となり、全九州の總監督として立つ事になつた。當時徵兵の成績はあまりよい方ではなかつた。第一流の同業間に伍して相對してゆくのは仲々の難事であつた。然し力闘遂に功を奏して、五ヶ年末よりはぐいと契約高は多くなつて、好況に向つて來た。第一徵兵は全國に出張所を有してゐた。福岡は第一番に支店に昇格したのである。支店に昇格することにも、吳服町の電車交叉點に事務所を新築し、大正八年起工同九年竣工した。

福岡支店の經營振りは、全國第一徵兵の營業の模範になつた。

壽業生命專務武末祐三郎氏

第一徴兵の生活は、大正十一年の六月迄つづいた。そして蓬萊生命相互會社に轉じたのである。

由來蓬萊生命は元代議士の鶴原定吉氏が社長であつて、粕屋義三、高橋光威氏など、専務取締役であつたのであるが、大正五年に鶴原氏が死去して、その跡を太田清藏氏が引受けたのである。太田氏が社長になつてから、宮本幸九郎が専務となつてゐた。宮本氏は元農商務省の監督官をしてゐた人でこの人が大正十一年六月引退したので、その跡に武末氏が専務の椅子についたのである。

蓬萊生命保險會社は契約者と社員とで成立する相互會社である事は喋々を要しない。氏が壯年にして會社の中樞に立つて采配を振つてゐるのに、氏の手腕をうかがひ得る。今では毎日銀座の本店にかよつて、日々良好の成績をあげつゝある社運を喜んでゐる。事務所は未だバラックではあるが近く新築工事に着手する筈である。

氏が福岡縣廳にあるの日、發着する事がなかつたなら、判任官の二等か、それとも高等官の最下に、傲然と部下に應對してゐたのがせいぜいであつたかも知れぬ。然し幸ひに修道院にも似て、臍足をのばすに由なき官人生活に見切りをつけて、實業界に飛びだしたのは、さすがに凡流をぬいてゐると云はざるを得ない。昔日氏が大學を出て決心した如く、一會社を意の如く動かさしつゝ契約者

の利益増進のために保險業に猛烈に活動を續けてゐる。

氏の宅には夫人との間に女子一人がある母堂は昭和二年死去されて、嚴父は尙古稀の高齡を以て郷里にある。氏の夫人は東京福岡間を往來して福岡にあつては武末氏の分まで孝養を盡されるに云ふ美談がある。

武末氏の眞の意味の活動は今後に期すべきものが多い。多くの青年に好刺戟を與へた氏の過去の半世の様に今後の氏の人生行路に又吾人の學ぶべき多くを示されるであらう。



奮闘主義を一貫して遂に  
高山組主になつた

### 建築業 高山憲三氏

#### ◇清水組に入る迄

總ての方面でそうであるやうに建築技術も目まぐるしい進歩の度を見せてゐる。東京が大正十二年の九月大地震に遭遇して以來焼け野の中に復興の高聲と共に高層な而も世界建築術の精粹を取つた堂々たる建物がどんくくと軒をならべて來た。清水組、大林組、松村組、錢高組、竹中工務所などの土木建築の請負業者がさかんに活動してゐる。

その清水組、大林組と並んで各方面の入札に参加し最も確實なる請負業者として令名ある高山組の主人高山憲三氏は福岡縣が生める人である事は我等縣民として實に喜ばしい事である。高山憲三氏の處世に對する考へ方は又その日常生活其のものは稍ともすれば奮闘勤勞主義を遠ざからうとし

てゐる現代青年にとつて、一つの大きな刺戟であり又一つの大きな教訓でもある。

高山氏は明治二十一年七月六日の眞夏のさかりに朝倉郡甘木町に生れた。祖先は二本差し殿父高山政喜氏の三男である。

小學校を経て福岡縣立明善中學校に入學し、卒業するや明治三十八年に藏前の東京高等工業學校入學四十一年卒業して直ちに合資會社清水組に入社したこの時年二十五歳である。

清水組は我國を代表する世界的の建築請負業である。所謂あまたの荒氣の職工を手足のやうに動かして全國的に大建築を請負つた。本店を東京に大阪支店を西區土佐堀に名古屋、京都、博多、京城に支店を置き横濱、金澤、廣島、高松、新潟、大連に出張所を置き鐵筋コンクリート建築の普級の趨勢に乗じて。華々しい活動を始めてゐた。

高山氏は營業部に勤務し主として工事實施並に請負即ち現場監督として男の華でかんとして氣力あり、そのために短氣な土工を巧みに使用して上下に親任さるゝに至つた。

#### ◇東洋建築視察の旅へ

建築業 高山憲三氏

然し一口に建築と云つても小住宅なら兎角現代の建築とこれから先の建築になれば、そこには開かるべき藝術の未知の殿堂がある筈である。

過去數千年の間世界各國の建築は皆其の氣候と風土と趣味と精神を源幹として發生したものである。随つて國の相違時代の相違民族の相違は自ら千差萬別なる様式を構成してゐる。是等特殊の様式は我等人類の祖先が後世に遺した一大寶典である。各國民の文化の性質を表明するのみならず、延いては將來我が建築界が進むべき経路を暗示するものがあらう。

大正四年憲三氏は清水組より選ばれて、東洋建築業の視察の旅路に登つた。即ち支那、滿洲、朝鮮を歴訪したのである。

總ての文化方面でも歐米のそれに満足出來ず光は東方よりの言葉の様に東洋研究が時の流行の如くなつた。建築界も多分にもれぬ廣壯なるコンクリートの石造の建築に如何に東洋風をとり入れるかは別として歐米の學者の支那古代建築の研究は益々さかんものがあり、塚本靖、伊東忠太、岡野貞などの三工學博士の研究もあり又實際の建築家の見學もさかんになりつゝあつたのである。幾多の哀史悲戀を秘めた宮殿樓閣勇士のゆめの跡唯叢をのこす城塞民の膏血によつて暴君がなせ

る大工事、朔風に北夷を征せし中國の英雄が沙漠の中に血涙をのんでも忘るゝ事の出來なかつた關門、烈士の古跡と古今四千歳の時の流れの昔と今との境點を作る碑碣又住宅店舗、我文明の母佛教の盛えた佛教建築儒教回教道教の諸建築、皆氏に深い感銘を與えないものはなかつたらう。

歸朝後大正八年には福岡市清水組九州支店長に轉じ九州一圓及山口縣下に於ける請負業一般を管掌した。この時代は未だ三十歳を越えては居らない。そして在任中大分縣廳十五ビルなどの仕事をのこしてゐる。大正十年七月には樺太工業株式會社顧問技師として、清水組より派遣せられ、眞岡町の同社製紙工場鐵筋コンクリート建六千餘坪の新築工事に従事同年末竣工した。この樺太行きは福岡出身の某先輩の推薦であり。大川平三郎氏は氏の工事振をひどく賞讃して高山氏に感謝状を送つた。現在高山組の事務所の應接室に掲げてあるのはこれである。

### ◇建築界の傾向

現代建築は時の古今と洋の東西を合した綜合の時代である。我々は福岡市の電車通をあるいても第一銀行にはコリント式の典雅な圓柱を認める。となりの安田銀行には雄莊なドリアン式の圓柱を

見る歐洲文明の文明發祥地、ギリシヤの古代建築が福岡の市内に發見せらるゝ時代である。建築は一種の藝術であり創造である。

文學に近代的運動がある様に、建築にもやはりその動きはある。新古典主義がそれである。

丁抹などのヘルウエラグ、メーラーなど最早人は建築家と云ふよりも藝術家と云つたゞらう。彩色に採光に調子に新鮮な風趣を横溢させてゐる。

この又反面にゴシックの復興式のグランドヴィック教會堂を完成せしめたビーヴィ、チニセントクリント氏なども其の圓熟せる技術の極點を示して世界の大きな興味を呼びあつめてゐる。

基礎移動の影響温度變化による材の伸縮の影響、振動力による材の伸縮の影響、單法運動強制振動など恐らく一般のものには何が何やらさつぱり解釋は出来ないが、所謂學術的に地震が建築物にあたへる影響を説明せんとする時に使用する言葉である。

完全なる鐵筋コンクリート建築は耐震的價値が大なるに反して一面不良なる鐵筋コンクリート建築程地震に對して危険なものはないと稱せられてゐる。これには又材料に對する研究が起らう。

藝術的に學術的に目ざましい發展をなして行く建築界に自ら一個の主人公として充分何ものにも

制肘せられず活動するならば之も男一代の痛快事である。

人生は奮闘すればよい。精根の盡きはつる迄働けばよい。其處に感謝が生れ誠實が生れ信用が生れ成功がおとづれるものである。幾多の立志傳中の人は皆そうである如く高山氏も實にこの主義を奉ずるの士である。

### ◇愈々獨立自營

眞岡の工場を竣工せしめた翌年大正十一年二月愈々獨立の旗をあぐべく決心した。愛顧を蒙つた上役や又信頼する同僚や敬愛してくれた部下のものなどの愛惜の中に、一同に別れを告げて同年七月愈々高山組を組織した。

翌大正十二年はあの大震災の年である我が建築界はその復興のために未曾有の活を氣呈して來た高山氏は言はゞ新店である。大震災直後の一年間全く氏は日夜寢食をわすれて、帝都復興のために建築業者として其の本分を盡した。得て人はかゝる場合火事場泥棒的な行爲に出づる事がある。然し氏には微塵もそんな處がなかつた。この時に其の人格と仕事に天下の名士の信用を贏ち得たの

である。

事務所を麹町區飯田町四丁目十番地に置いた私邸は小石川區宮下町二十四番地である。

今高山組によつてなされた工事の重なるものを羅列して見やう。

官公會社方面では、

淺野セメント株式會社(東京一四〇六坪)

日本加工製紙(東京五二五坪)

大島製銅所(一九六一坪)

樺太工業惠須取工場(二三九二坪)

富士製紙倉庫(六九三坪)

樺太工業惠須取三期増設(二四八九坪)

武州銀行を始め卅七を數へてゐる。

學校病院寺院商店では醫學博士の桐淵病院、日本中學校、埼玉縣勝光寺、府下誓願寺、向ふ島弘

福寺をはじめとして高橋ビルヂング、高橋商店、安福商店、子爵井伊直方氏の納骨堂秋山ビルヂン

グ、築地ビルヂングなど三十一件ある。

住宅工事では大川平三郎氏、陸軍大將尾野實信氏、桐淵博士、長岡外史中將、松永安左衛門、荒井誠一郎、東郷安男爵、黒田長敬子爵、高田直屹、井伊直方子爵、藤山雷太、團琢磨男爵野作辰治、尾高豊作の諸氏の邸宅などがある。

昨年七月朝香宮家の信州杵掛御別邸も實に高山組の作る處で工事竣工の節は宮家より記念品として三重組の銀盃を下賜されてゐる。

高山憲三氏の小石川の邸にはお嬢さんと夫人の三人である。令兄久雄氏は元鐵道省の役人であつた本年五十三歳留居役を承はり、品川に居り、令弟辰身氏は瀧野川に居をかまえてゐるが、現在は樺太とを往復して居る。

高山組の中心となるべき社員三十有餘名は憲三氏を小石川、久雄氏を品川、辰身氏を瀧野川と愛稱してゐる。これなど組内の雰圍氣を雄辯に物語つてゐる。兄弟三人皆心を合せて高山組の事業に奮闘してゐる。次兄の國重氏は故郷甘木にあつて三井物産の特約店をなし東京の忙しい折は出京して加勢をする云ふ。

團男爵が佛の如く福岡出身の事業家には後光を照してゐる。氏には先輩の引立てあり自らは確實な工事振を以て信用を有しており充分の手腕を有してゐる。その將來は又期して見るべしとは萬人皆信する處である。清水組小林組と併稱さるゝの日も遠き將來の事ではあるまい。終りに氏の健康を祈つて擲筆する。



豆腐の行商から歸博視米商界に  
覇をなした

米肥商 故 財部萬太郎氏

◇九十九谷を行商する孝子

天の時、人の和、地の利を、成功の三要素に數へて居る。事業は一に人二に人三に人といはれて居る。

しかし現在では何事も丸持の天下である。一に金二に金三に金三喝破した正直者がより人の敬服を得るに至つて居る。

その金を中心に總べての悲喜劇を演出しながら、人々は血どろみになつて争ひを續けてゆく。しかもその中戦勝の月桂冠を得る者は何人ぞ。最も欲する者は恵まれ、最少に欲する者は最少に恵まれ、恵まれざるが故に尙欲す。欲しながら常に貧困である。しかし他方一度その小部分の増加分子

米肥商 財部萬太郎氏



を得れば金は類を以て集まる如く、金庫の中に飛び込んでくる。

幸運とのみ一口に断言できない、或る要素が、常に所謂成功者の蔭に潜在して居る。今紹介せんとする福岡市紺屋町米肥商丸萬として有名である故財部萬太郎氏に、その一例話を發見するこゝが出来る。

財部萬太郎氏は藥院出口に生れた。時明治五年、兩親は細やかな綿店を営んで居たといふ。その頃から明治新政府は動亂の種をはらみかけて居る。熊本、佐賀、萩、秋月の諸亂が勃發する。兩親の綿商は面白くなかつたらしい。間もなく事業失敗といふ悲運が氏の一家を襲つた。

父親が中風で病床に横たはるこゝになつた。氏は尙五人の弟妹を有して居た。如何にせん一家の糊口を養はんミすれば年はゆかない少年の氏が働くより外に手段はなかつた。

細やかではあるが、豆腐屋をはじめた。かたはらに野菜を賣つた。田舎より新鮮なものを朝まだきに買こんでは、隣近所に賣歩いた。當時谷は福岡近傍で最も人家があつちこつちに散在して容易に地理になれるのに困難な所であつた。

しかし氏は、雨のふる日も、風の日も、一日として休むことなく、病父のために愛する弟妹のため

に天びん棒をかついだ。

當時血氣時代の頭山満氏が谷の山荘に靜かに心膽をねつて居た。

沈深淵、望巖峰、待赤陽

の心境にある頭山氏は、谷間の白雪をふんでくる少年の豆腐賣の聲に、靜寂そのものゝおくから同情を禁ずることができなかつた。この少年こそ萬太郎氏である。

この孝心はいたく世の同情を引いた。當時福陵新聞と稱して居た現九日の前身が社として表彰することにした。當時新聞紙の勢力は今日程なかつたことは明らかである。内々表彰するこゝにしてゐた縣の官廳筋では新聞紙に機先を制せられたのを面白く思はなかつたらしい。遂沙汰止みになつたといふ。

#### ◇米穀界に丸萬の名を賣る

十七八歳頃迄は野菜賣りをして貧苦と闘ひ來た。氏も運送店や養巴町の豊後屋などの車力を引いた時代もあつたらしい。明治三十二年に養巴町の角に米穀商を開いてゐる。これが氏の成功の第一

歩であつたのである。正直で良品を安く賣ればよいとは商賣の王道である。氏は言葉通に實行した信用が日増についてきた。

福岡は兎角莫々たる大人物を生む。頭山翁、杉山氏の如きその典型的人物であるが、その放膽なところを誰しもが有してゐるのは博多人の特質である。これに幾度か血涙の辛苦をなめざるを得なかつた萬太郎氏は剛の性格を作つてゐた。しかも多くの氏の友人の語るところによれば世辭ぬきの明敏なる頭腦の所有者であつたのである。この頭腦は必ずや氏の活動すべき世界がいかなるものか、いかなる商賣道に精進すべきかを明かに認識したに違ひなし。

世は資本主義の興隆期である。なすある人物の走るべき方面は致富の世界でなければならぬ。

明治三十九年には紺屋町に移轉してゐる。

明治四十年頃氏の最も豪快な仕事をやつてのけた。

當時外國米の輸入は福岡では神戸から五十袋から百袋程度を一口こして取引してゐたに過ぎなかつた。萬太郎氏は注文した外國米がとて品質がよく、博多近傍の嗜好に適するこみを發見して三十五歳の無名の一米穀商として西新の野や濱の吉原老舗を後に瞳若たらしめ汽船一艘の輸入を敢

行して福岡に丸萬ありの語をなさしめたのである。

### ◇豪放なる商賣振り

氏は期米もやつた。しかし仲買が主で定期師の語を以て氏を語るは不適當である。しかし勿論期米の方で働いたことは、博多人の誰にも後にひかない。唯だ四時のべつ暮なしにやらなかつたまでである。やればとことんまでやる底の商人であつた。

丸萬は平氣の人だつたとは一般の評である。いくら人が賣にだしてもびくともしないで買つてくれた。不利であれば半年でも一年でも又二年でもじつと持こたへたことがある。驚くべき根氣がその生涯に幾度か示されてゐる。

取引は直方地方北海道滿鮮臺灣神戸など、廣い範圍に渡りかつてはハワイに糸島米の輸出を試みたが運送中潮水の爲か品質が悪くなつて賣買に不便を來し、一度限で中止した。

最も花々しい定期米の戦ひは、明治四十三年の共進會の時機であつた。荒津、園田、松尾などの雄將は歩調をそろへて賣にきた。財部氏は孤軍奮闘し買の孤城を守らざるを得なかつた。賣は益々

多くなる。財部は裸となつても持続は覺つかない。しかし氏の豪腹がこの時程明確に示された事はない。博多倉庫(當時鎮西倉庫)始め福岡市中の主なる正米は殆ど氏的手中に歸した。尙ほ下落續きでゆけば恐らく紙上に財部氏に見ゆる機會は永遠になかつたのであらう。其處が運の尙つきざるものといふべきか、突然として關東の大洪水が起つて天井知らずの暴騰を續けた。氏は今までの損失を償却して尙多額の利を占め、その豪膽を斯界に賣だしたのである。

### ◇氏の性格と當代

開けては縮まり、縮まつては開けてゆくが、商業に限らずあらゆる方面の現象ではある。且つて氏は多額の玄米を倉庫の中にむなしく藏して其の賣却法に困惑した。幸ひ退營した氏の令弟甚太郎氏の盡力で二十四聯隊の陸軍御用達となり、納米することができ始めて愁眉を開いた事もあつた。氏は徹頭徹尾商道に精進しきつた人である。別に趣味といつて取たてゝいふ程の事もない。米穀商賣の事のみを頭をめぐらし、四時いそがしく殆ど座席あたゝまるひまもなかつたといふ。特に稀に見る暗算の早い人で、使用人が算盤で三は七取つて上がるといつてゐる間に、幾らにならうがな。

と機先を制せられて一驚した事はよく聞く逸話である。又米の品質鑑定に至つては優に福博の第一人者であつたらうとは、定評ある事である。

「米屋は二代續かず」とはよく引用さるゝ例である。先代が期米をやれば次代もやる。これが失敗の因である萬太郎氏は子息の幸太郎氏にお前は定期をやるなど、しみじみ訓しめしとか。

當代幸太郎氏は先代の遺訓通り堅實一方の商道を踏み、先代は仲買を主としたが、當代は小賣を主とし、日々に繁榮してゆく藥院方面を得意先とする故に、日々顧客が増加してゆきつゝある。

米穀商の明治大正昭和三代を通じての最も目覺しい書入れ時は、大正六七年の米騒動前にあつた。一日二臺か三臺かの貨車の米が、其の場に賣きれた。この時が西の野か東の丸萬か博多人に歌はれたのである。現在の店舗は當代になつて大正十四年の新築である。昔日は期米には千二三百丁の幅がありえたが、現今では多くて五百丁位で、通信運輸の便がかく發達しては、それとも突發事件が起らねば先づ、思惑など効果がなくなつた。それほど米穀商なるものが危険率が少なくなつたわけである。多くの白米小賣商が、公設市場の開設のために打撃をうけてゐるのが多いが、丸萬では親切によい米を安く賣る。しかも奮闘主義をとつてゐるために、何等の痛痒も感じないといふ。萬

太郎氏は少年時の境遇のにより、學校に學ぶ機會を逸した。これを助けたのは即ち甚太郎氏で、祐筆の如くして蔭に働いた。

萬太郎氏は心中常に多忙でありながら、家内の者に殆ど一言の小言もいつた事がない。しかし何となく威を藏して店員一同恐服してゐたといふ。それでよく人に好感をもたれ、今日に至るもたれ一人蔭口を利く人もない。その豪快な性格は商賣の他に、酒に現れて斗酒尙辭せず組であつた。氏が五十一歳を最後として大正十二年六月永眠したのは福博米穀商界に一抹の寂しさを感じしむるものがあるが、當代よく業を守るから華美でなくとも、堅實な繁榮を期し得べきものであらう。事業成功の蔭には女の力のある事は一般の認むる處であるが、殊に財部氏に於ては此の母ありて、此の子ありて、如何に萬太郎氏に母堂の教訓よろしきを得たかは同地方に住む老人の口からの讃辭に依つて知られる。



終始一貫洋服屋で叩きあげた

### 裁斷師 坪田千太郎氏

#### ◇手先が器用で洋服屋の弟子入

フランスのある青年は政治家を希望してゐた。然し、或る日下院を傍聽して首相の雄辯を以てして尙反對黨を説破し能はざるを見て、翻然として望みをかへ、他人の頭を貴賤を問はず自由に動かして得る床屋になつた。鶏口となるも牛後となるなかれとの東洋の教へがある。現代に於て青年の目醒むべき點は、たしかこゝにある。職業には貴賤はない労働は神聖である。この思想は單に己れの天分に合する職業に精進する事に人生の意義を認めて、始めて成立し得るものである。ここに洋服技術界の王者坪田千太郎氏の奮闘談をものして實例と生きた教訓とを學びたい。

坪田千太郎氏は明治五年の八月二十九日荒戸の四番町に孤々の聲をあげた。嚴父は坪田三之進と

稱して美男の誇高く小姓頭として五百石をいただいてゐた。然し廢藩置縣と共に帶刀を捨てた父君は、手先の器用なのを取り柄として、大工町に時計店を開業した。これが福岡に於ける時計屋の嚆矢にして、現在の東中洲の京極内の永野時計店の如き、其後に出來たものである。

やがて吳服町に移轉したが、嚴父の死去あり、遂に廢業の己むなきに至つた。當時千太郎氏は十二歳であつた。氏の伯父小河久四郎氏の關係上氏の令兄の穂積氏は十七銀行の給仕に出た。母堂は吳服町の家で針の師匠をなし弟子二十餘名を集めたが、家が廣過ぎたので半分を小倉の洋服屋後藤嘉作氏に貸した。この後藤氏は當時二十四聯隊が新設されたのでその御用達をやつてゐた。

坪田氏と洋服との關係はこの後藤氏によつて生じたのである。後藤氏は深く千太郎氏の手の器用なを見込んで、母堂に自分の弟子にやつてくれまいかと所望した。千太郎氏は弟子入りをする事になつた。後藤氏は小倉に本店を持つてゐたので、坪田氏も小倉に行くことになつた。當時ここに福岡出身の徳永専次郎氏が室町二丁目を開業してゐた。そして支配人が立洋社の久野藤次郎氏であつた關係上、其處に入つて加勢することにした。

氏は幼時非常の腕白餓鬼大將で殆ど手のつけ様もなかつた。兄さんが温厚なので、兄の仇討をするのだと附近の小供を泣かしてゐたこの腕白は然し方面をかへて仕事の研究方面に向つて發せらるるに至つた。

徴兵迄に下關、佐世保など洋服修業の旅に廻つた其の中佐世保に於けるが如き、高橋洋服店の職長をしてゐた時は年未だ十八歳に過ぎなかつた。當時佐世保は鎮守府開設當時なので、非常の活氣があつて、水兵の洋服は全部自分の手を入れて、月給二十五圓をもらつた。

徴兵検査には甲種合格陸軍縫工として二十四聯隊に入り縫工長代理として、三ヶ年間切つてまはした。この時に丁度日清役が始まつてゐるが、その戦時服を引受けて活動してゐる。

明治二十八年三月除隊になり、腕をみかくには上京するにしくはなしとして上京し、福岡出身の鶴原定吉方に寄遇し、陸軍火藥製造所長明石藤次郎氏の世話によつて、軍服をもつて有名である四ヶ谷麴町十二丁目津田屋洋服店に入る事になつた。

### ◇愈々渡米しロツキー山で山猫に襲はる

津田屋洋服店時代は二年間つゞいてゐる。其の後金山貴族院書記長の身元保證のもとに、二十七

歳の折遠く大平洋を越へて渡米し、シヤトルに先づ止まつた。然し何よりも會話に通ぜねばならぬ。キリスト青年會に入會し、エビシから一心に勉強研究をつゞけて、其の後一年間スクールボーイをやり、一へんの會話はなんなくやつてのける様になつた。勿論その間には言語に言ひあらはす事の出来ない苦心談が秘められてゐるであらう。此の間英領ブリチツシニコロンビヤのピクトリアにも遊んだ事がある。

シヤトル市のメインストリートに洋服店を開業したのは二十八歳の時である。

然し何分渡米して未だ月日は立つて居らず、それかと云つて信用はなく、先づ資金難に陥らざるを得なかつた。在米邦人は金に窮するとカナリーカソウミルに出掛るのが常である。一日十弗の給料にありつけると云ふので、坪田氏も金策のため製材所に三週間働くことにした。そして西洋人五人と氏を加へた六名の一行は山猫の出るミ噂あるローキーの山地深いソウミルに出掛た。

千古斧鉞を加へざる大森林の神氣を呼吸しながら、廣く脈々としてつきない大溪谷の中に日本男子の斧の聲をひびかした。晝は終日木をたふした。唯だ大木が地ひびきをたててどつと倒れる音に無限の快感を味はしながら働いた。夜は襲ふて人を喰ふと云ふ山猫を警戒し又火を守つた。

或る夜の如き連日の極度の勞働に身體まつたくつかれはててうつらうつらして、時々火の中にはしる木枝の音に目を重く見開いた。いつの間に眠つてしまつたのだと、ぱつと氣をとりなほすと、前面に噂さの山猫が出現してゐる。油断を見すまして、あたらしい食物に舌打ちせんとしてゐるのである。仰天した氏はサツクからピストルを取出して三四發ボン／＼打出した。山猫はいづこかへ逃うぜたと云ふ逸話もある。

この勞働によつて二百十弗の金を得たので、シヤトルの洋服店は人にゆづり自らはシカゴに出てシカゴのハブ洋服店に入つて婦人服を研究した。次には紐育のベツカルベヤの名洋服裁斷家ウイリアム、フランクリン氏に師事し、更にセントルマン洋服裁斷専門學校ミツチエル洋服裁斷専門學校等に六ヶ月間研究して、腕に充分自信がつくや、紐育のまん中プルクリンに洋服店を開業した。

#### ◇業成つて歸朝三越に入り再び英佛の旅

功なつて郷に歸らざるは錦繡を着て夜ゆくが如し、古今人は云つた。坪田氏の場合も、氏の渡米は白色人間に異色の民として、洋服屋を營業してゆくのが目的でなかつたことは、明かである。即

ち歸朝しみがいた腕を充分郷國に於いて發揮して斯業を幾分でも啓發しやうといふ考へがあつたに相違ない。明治三十五年三十歳にして氏は歸朝し直に福岡市天神の町に洋行歸りの名美々しく開店したのである。

間もなく然し日露の役が始まつてゐる。氏は小倉の十二聯隊の輜重卒に編入されたが、大里俘虜收容所勤務俘虜係りになつた。勿論氏は久しく米國にあり外國の事情に通じ又英語を巧みにあやつる事が出来たからである。

明治四十年三月に平賀義美氏の世話によつて坪田氏は東京三越の洋服部に裁斷部長として入る事になつた。同デパートでは氏の手腕に大いに嘯する處があつて、歐洲各國に洋服裁斷術修業の留學を命じた。

即ちロンドンのミニスター及びトムソンの洋服裁斷學校に學び堅實な上品な英國風の裁斷法の眞髓をつかみ、優良の成績を得て同校を卒業し、パリに渡つては、婦人流行界の中心と呼ばれてゐる都會故に婦人洋服に就て深く研究し、ベルギーのブラツセル市に又得るだけの價值のあるものを皆をさめ、歸途マルセイユ、シンガポール、香港、上海を視察研究し、二ヶ年の年月を経て最新智識

を收めた洋服師として歸朝した時、正に明治四十五年三月であつた。

其後尙三越洋服裁斷部長としての氏の活動は續いた。

當時陸軍にては在來の服裝ではどうしても兵士が疲勞していかぬ。何とかして改良の餘地はあるまいかと非常に苦心してゐた。陸軍に關係深い三越の坪田氏が歐米洋服界の新智識を收めて歸朝したので、早速陸軍省の方から相談があつた。氏は快諾してその全力を傾倒して新型の軍服を作つて陸軍省にをさめた。陸軍省はこれを全國に配布したこれが現在行はれてゐる型である。

#### ◇大震災を機會に獨立開店

氏の三越生活は、三越が如何に大なりと云ふものゝ、サラリマンの生活には相違ない。坪田氏は既に十三歳をかしらとして、四人の子女があつた。獨立したい希望が熾烈にわいて來た。辭表を出した事もあつたが主腦部の切なる勸告があつて、遂に決心を離した。然し大正十二年關東の大震災に東京市は全く灰燼に歸し、一時いにしへの武藏が野の有様を呈した。これを機會にして氏は遂に三越を退き、四ツ谷左門町に開業したのである。其得意先を見るに、

裁斷師 坪田千太郎氏

李王殿下を始めとして、金子堅太郎子爵及び武鷹氏團琢磨男爵及び伊能氏牧田環工學博士平田學後藤武夫末永一三村島丈夫の福岡出身の諸名士より、

田中義一總理大臣、高田早苗、三井高精、安川雄之助、松方五郎の諸氏

財界知名の士の用命を受けてゐる。特に今上陛下の御大典には田中總理大臣の大禮服を作つてゐる。

三越に在職中、秩父宮殿下、高松宮殿下、久邇宮、梨本宮、朝香宮殿下、李王世子殿下、各大臣の大禮服は氏自身が擔任裁縫調進してゐた事は勿論である。特に洋行者には、英米佛それぞれ其の地の流行のスタイルに裁縫する。其の點東京の貴顯の階級に顧客を有する理由である。

坪田氏は現在全國洋服商裁斷研究會講師東京市洋服商工組合四谷區部技術顧問東京女教員洋服裁縫研究會講師京都市婦人聯合會洋服裁斷講習會講師八幡市洋服商工組合裁斷講習會講師をつとめてゐる。

今略述した處で、大體に於いて氏の我洋服裁縫界に占むる地位を、明かにしたつもりである。即ち一藝に通ずるは萬事に明かなるにまさる。一流の技術家こそ世の寶である。

坪田氏が九州の各地をめぐり、又北米の各地に苦學を續けて、ひたすらに技を練つた點は、吾人に教ふる處實に甚大である。

さればこそ三越の洋服裁斷部長になつたのだ。實に日本一の洋服裁縫師と稱するも過稱ではあるまい。氏は現在獨力店舗を有してゐる。その力圖如何は直に信用にかゝはる。氏は本年五十八歳とか。最も腕のかれて圓熟してゐる時である。氏の跡をつくべき弟子も多く養成されてゐることである。

吾人は氏が今迄の如く貴顯の信用と賞讃をから得益々業務の發展せんことを祈つてやまぬ。





商策悉く圖に當り岩田屋王國を築いた

### 吳服商 先代 中牟田喜兵衛氏

#### ◇岩田屋の先祖

凡そ物の建設は至難である。關西唯一の大吳服店として斯界に重きを爲す博多麴屋町岩田屋吳服店が今日の盛大を來すに至たのは決して一朝一夕の偶然事ではなく、五十有餘年間の苦心の結晶が此處に至つたもので、物の建設の容易ならざるを物語る裏面には立志傳的の所謂先代中牟田喜兵衛氏の奮闘努力の人知れぬ苦心が潜んで居る。

元來岩田屋は福岡市大工町吳服店中牟田藤兵衛氏方が本家で、大工町岩田屋は黒田侯筑前入國以前即天正年間からの金持ちで早良郡入部村の荒平城下に住み城主小田部民部大輔鎮西入道橋紹吡の軍用金などの用達をして居たと云ふ記録がある。二百年前黒田藩に至つては御用商人を爲し丁度七

代目の常主中牟田藤兵衛氏の實弟久兵衛氏が博多麴屋町に岩田屋の支店を開業し、吳服商を營んだ。それは五十餘年前の事である。當時同家に隨伴の店員には現在中洲町料亭第一後藤の主人後藤利七氏及、元の丸三吳服店主三苦寛兵衛氏があつた。然るに主人久兵衛氏が其後病死した爲め後藤三苦兩氏が主家岩田屋を護つて經營を續けた。時恰も明治十年の西南戦争の直後で經營は頗る困難に陥り、且つ大工町の本家岩田屋も更らに振はなかつた。

#### ◇先代喜兵衛氏

博多の岩田屋吳服店の今日の盛大なる基礎を築いた先代中牟田喜兵衛氏は、朝倉郡甘木横田町の出生で幼名を藤田司米次郎と云ひ、生家は木綿晒し（賃取り）を業として居た。十五六歳の頃久留米の某吳服屋に丁稚奉公に出たが家風が氣に喰はず、且つ末の見込みがないので、思切つて暇を取り幸ひ其頃兄の忠兵衛氏が大工町の岩田屋の番頭であつた傳手で、同店へ小僧として入店した斯くて四五年する内其勤勉と明智は主人藤兵衛氏の眼鏡に叶ひ、囑望されて店主の妹の配偶として、貰はれ、明治十五年經營困難の博多の岩田屋を引受け一切を切廻す事になつた。其當時隨伴の店員は

吳服商 中牟田喜兵衛氏

後の岩田屋小間物店主宮本仙太郎氏岩田屋雜貨店主中牟田正七氏等であつて、當時の岩田屋では『又板』と云ふ家を半分仕切つた表口二間半家賃一ヶ月六圓の極めて小つほけな借家であつた。

斯くて刻苦勵勵専心堅實なる營業方針に依つて營業は次第に發展し、岩田屋の基礎は徐々に築かれ明治廿一年九州沖繩八縣聯合共進會が福岡市に於て開催された頃より順調に進み、同二十六年遂に今迄の借家を買取る事が出来た。次で翌年又板の母屋も勸められて買取り店舗を擴張し、次で二十八年東隣り井上卯助氏の所有家屋を買入るなど、益々營業は發展の域に進み、此頃より功勞ある店員は順次に別家獨立させた。之れと共に家屋土地等の賣物で買取方を相談されたものは買入れ動産は大に殖えて來た。斯くて明治三十五年店舗の新築（以前の店舗に成り飽迄も營業方針は堅實を以て進み市會議員其他名譽職等を持たれても皆辭退し、唯だ麴屋町々總代のみを引受け一意専心家業に勵み、宗教に心を寄せ信仰生活に生き店員一同に對しても宗教的修養を施されたのである。

#### ◇當代喜兵衛氏

當主喜兵衛氏は、年少氣鋭の新進の實業家である。佐賀市の丸持ち長者丸木屋百貨店主山下氏の次男で當時福岡商業學校長太田徳次郎方に寄宿して、同校に通學中も成績拔群で押通し、卒業後實家に歸つた後上阪し商業の實地研究中を先代喜兵衛氏の眼鏡に叶ひ、懇望されて養子に貰はれ、現夫人喜代子と結婚、岩田屋吳服店の基礎は益々磐石の重きを加へ、且つ極度の發展を遂げたが、可惜先代喜兵衛氏は功成り名遂げて大正十一年十二月十七日六十四歳を一期として永眠された。而して福岡市の貧民救助の爲めに金一萬圓を福岡市に寄附された事などは實に近頃特記すべき美事である。

當主喜兵衛氏は喜十郎と云ふて居たが、先代死後喜兵衛を襲名され先代の遺訓を守つて飽迄堅實な營業方針で進み、紙與吳服店が亡くなつた後に、玉屋吳服店が出来たが岩田屋は依然として福博吳服店の明星として輝き、店舗の大改築が行はれた後は、名實共に關西唯一の吳服店として雄飛するものとの世評を贏ち得るに至つた。而も店舗の新築は幾分洋風を加味したお家風の新装で、同店の堅實さを雄辯に物語つて居る。

今や岩田屋吳服店の資産は一千萬圓と云ふ世評でめる。他家の資産を云々するは好まぬ事であるが、尠く見積つても確實に六百萬圓は下るまいと思はれる。現在博多土居町電車通り角に所有する

土地も一坪二十六圓で已むなく引受けたのが、今では坪一千圓と云ふ夢の様な話もある。此外に多勢の借家も所有し家賃だけでも一ヶ年五萬圓は下らないさうだ。尙最後に記したいのは恩顧を受けた店員に依つて技誡會の組織されて居る事である。舊主喜兵衛氏に對する報恩の意を以て舊主の死後發會式を擧げ毎月十七日の命日には布教師を招き同店樓上に於て位牌を前にして修養談を聞き一家一門業を休んで参拜し、尙年一回大法要を營むなど誠に美しい限りである。因に當主喜兵衛氏は現在福岡市吳服商組合組副長にして本年二月同組合を代表して博多商工會議所議員に選ばれ二期つとめて居る。

日給十五錢の給仕から運輸王になつた

國際通運社長 中野金次郎氏



◇先づ日給十五錢の給仕へ

『成功』とは主として幾多の辛酸を得て、晩年に得るものかの如く、曲解する者が多い、が然し熟慮周到、處生の道に長じて居るなれば、決して壯者たりとも、其の榮冠は得るものである、茲に紹介する中野金次郎氏の如き、壯者成功の一人であり、老ひも、若きも見逃す事の出来ない一大參考資料たるを疑はぬ。

我が國陸上運送の發達史を按ずる時、内國通運株式會社を見逃がすことは出来ぬ、其の内國通運の十數代目の社長に中野金次郎氏が就任された、當時内國通運は永い間ゴタ／＼を繰り返して紛擾の絶え間が無かつた。

中野氏は周到なる用意と非凡の才能とを以て猛然一大鐵槌を振つて其の禍根を除き、内訌を治める事と同時に社内の改革を断行した、後鐵道の懲慚に依り國際運送株式會社初め全國の有力なる同業十一社を併合し國際通運株式會社と改稱し推されて之れが社長となり、今や日東の運送王と謳はれるに至り、有爲の小壯實業家として中央に活躍せらる、氏の如き正に立志傳中の人である。

福岡縣若松を搖籃の地とし農家の子として成長し、傍らコークスの空袋の賣買などに従事した可憐の孝子であつた。氏は、高等小學校を卒へると、當時私設であつた筑豊鐵道株式會社の給仕となり日給拾五錢を支給せられ、社會への第一歩を踏み出したのである。

明治三十八年迄八ヶ年間、拾五錢の日給より月給二十六圓に至る迄兎も角大いに奮闘した、此の期間が氏の第一期の苦心修養の時であつた「精心誠意仕事をする」さいふ事が氏の信條であつて、早出晩退他人の仕事迄引受けてドシ／＼用務を片づけて行く、これが氏の實際であつた。又氏は學問の必要なることも痛感して居た。裕福ならざる家庭は氏をして高等小學校以上の登校を許さなかつたが、氏は「學問は學校の専有ではない、至る所に活きた學問が横はつて居る、入學隨意の學校が何處にもある」と悲壯なる決意を以て事務の傍ら必要なる書籍を涉獵することを怠らなかつた、

上長の信頼を贏ち得た事は當然であつて、又同僚にも非常の信望を受け常に尊敬されて居たのも故ない事ではない。

### ◇運命の一轉機

明治三十八年、二十四歳の時氏の運命に一轉機が起つた、それは叔父さんに當る秋田氏が下關で巴組肥後又といふ廻漕店を經營して居られ、門司に其の出張所があつた、處が此の門司出張所の業績が一向思はしくない、人材が居ないのか、經營方法に缺陷があるのか非常な經營難に陥つて居たそこで秋田氏は氏に門司出張所の經營を懇請せられた。

然しながら氏は此の出張所の經營を引受けることを躊躇した、といふのは親類の御世話になつて仕事をすることを潔しとしなかつた、獨立獨歩でサツパリと男らしい仕事をして見度い雄志を抱いて居た。しかし此門司出張所の衰運を挽回するものは氏より外にないといふ叔父さんの切なる願望を辭み兼ね遂に之れを引受くる事となつたのである。

氏は病氣に籍して別府溫泉に一ヶ月を閑居して陸運、海運に關する參考資料を漁り豫備智識を涵